
サンタクロース・ライフ

妃宮 咲梗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンタクロース・ライフ

【Nコード】

N4836P

【作者名】

妃宮 咲梗

【あらすじ】

サンタクロース。彼はクリスマスに良い子の為にプレゼントを配って回る。そんな彼の日常生活とは？ 夢見るクリスマスのイメージを根本からブチ壊す、ハチャメチャギャグバラエティー小説！（下ネタギャグがあるので、苦手な人はここにてUターンゲットアウト！ww）

style. 1

私の名前はニコラオス。

学問の守護聖人であり、過去ではアリウスの異端共とも戦いを繰り広げた経験を持つ、教父でもある。

だが昨今、今や私はサンタクロースへと役職を変えて、クリスマスにもなれば世界中の子供達にプレゼントを配って回り、少しでも神からの祝福を分け与える為に尽くしてい……。

途端、彼の背後のドアが激しく開け放たれたかと思うと、けたたましい罵声が飛び込んできた。

「ちよつとアンタ！！ さつさと夕飯食べてしまいなよ！ せっかく作った手料理、冷めちまうだろう！！」

「アンタじゃない！ サンタだ！ 今世界中から届いた手紙を読むのに忙しいんだ！ もう少し待ってくれルドリー！」

ニコラオス——愛称、ニコルはそう鬼妻のルドルフに振り返って弁明すると、フン！ と鼻を鳴らしてドアを叩き閉める彼女を見送った。

そう。ニコルの妻は、赤鼻のトナカイであるルドルフなのだが、ヒトヒトの実を食べた悪魔の实の能力者もどきでもあるのだ。……何？ トナカイなら既にオリジナルでチョッパがいるだろうって？ 大丈夫。あれは青鼻だ。何の問題もナッシング。

すると、再びドアが開いて今度は彼の息子が顔を見せた。

「親父。俺が手紙読んどいてやつから、飯済ませて来いよ」

「おお。ありがとうな。クラッピ」

「クラッピと呼ぶなっつってんだろう。今度言ったら斧でその記憶力のないどたま、叩き割るからな」

そう冷静沈着に言う息子、克蘭プスは父親の座る椅子から彼

を押し退けて身を投げるように座ると、机の上に散乱する手紙を物色し始めた。

クランプス——彼はニコルとルドリーの双子の息子で、世間では良い子にしていた子にはサンタがプレゼントをくれるが、もし悪い子だったらその子らをビビらせる役割を果たしている。

そしてそんなクランプスは双子の兄に、クランペンがいる。彼は、特に悪い子だった若い少女を相手に鞭打ちをする役割を果たしているのだが、時折度が過ぎてお仕置きのつもりが“新たな命”をプレゼントしてしまう事がしょっちゅうで、いつも母ルドルフに避妊具を持ち歩くと叱られている。

つまり、本来逆説でクランプスとは錆びた鎖と鐘を持ち、悪い子に警告し罰を与える為、子供と女性を怯えさせながら通りを練り歩く伝統を言うのだ。

父親が出て行った後、クランプスは手紙を凝視しながらぼやいた。「なんだこれ。フィンランド語じゃねえし。何これハングル語？読めるかボケ。おいラペン！お前なら読めるだろう。世界中の女口説く為に世界各国語勉強してんだから」

そう大声をあげて、双子の兄を呼んだ。

「酷い事言うなあ、ラプス。僕は愛のお仕置きで、更生させているだけなのに」

「逆に母親となって更生させられてんじゃねえか。とにかくさっさと翻訳しろ。俺がリスト書いていくから」

こうしてニコルの息子達は、サンタクロースの仕事をする父親の為に影で支えているのであった。

s t y l e . 1 (後書き)

気紛れで書き始めた息抜き作品w。
目指すは年末までの完結ww。

style. 2

“サンタさんへ。今年はオネシヨをしませんでした。なので、トランスフォーマーマスターピースMP-01コンボイのオモチャをください”

「だって。この子はアメリカNY在住のジョン君。10歳の男の子からだ」

「OK。ジョン。はい次」

兄克蘭ペンの手紙の朗読を聞きながら、次々とPCでリストアップして品物と照合していく弟の克蘭プス。

“サンタクロースさん。お父さんが毎晩お酒を飲んでは暴力を振るってきます。優しいお父さんにしてください”

「お父さん、荒れてるねえ。この子はドイツのリーラちゃん。ドレステン在住の7歳の女の子」

「任せろリーラ。このお兄さんがそんなクソ野郎、釘バットで滅多打ちにして更生させてやろう。はい次」

克蘭プスはリストアップした彼女のデータから、父親の画像を呼び出すとロックオンと表示した。

“サンタさん。どうせ本当はこの世にはいないんでしょう。私知ってるのよ。それでも幼い頃に抱いていた僅かな夢と希望に縋りつくだなんて、私ったらバカな女……。3ヶ月前、2年間付き合った男と別れたわ。彼、ジャンキーだったの。しかも浮気性。最悪でしょう。彼と別れて私、タバコを始めたの。見る目がなかった私が悪かったのよ。今年のクリスマス、一人ぼっちで孤独だわ。こんな私に、温もりをプレゼントして欲しいわ”

「うわぁ。痛い女だなそいつ。どうせお前行きだな。ラペン」

「うん。そうさせてもらおうか。ちなみにこの子はフランス在住のシャロン。13歳の女の子ね」

「13!?! 大人の女じゃねえのかよ! 随分冷めた性格してんのな! そのガキ! つか、13はさすがにお前無理だろ! ロリコンだぞ!」

「何言っちゃってんのラプス。こういう女の子こそ、早い内に女の喜びを教え込む必要があるんじゃないか……。彼女、ヴァージンでありますように」

そうして両手を組んでから、天を仰いで陶醉した表情で祈る姿勢を見せる克蘭ペンに、容赦なく頭突きを繰り出す克蘭プス。

「サンタの息子が誰に祈ろうってんだコルア! てめえお袋にバレたら殺されっぞ!」

「アハハ。だよ。じゃあ仕方ない。この子は鞭打ちの刑でMを開花させてやろう」

弟の頭突きを受けた頭をさすりつつ、穏和な口調ながらも克蘭ペンの表情には早くも、本来のDSな笑みが浮かび上がる。そんな兄に呆れながら克蘭プスは、その13歳のシャロンをブラックリストに入れて、ラペンターゲットの表示を打ち込んだ。

“サンタさんへ。今日僕が学校から帰ってみると、家でパパがママを包丁で刺し殺して、そのパパが首を吊って死んでいました。二日前、夜中トイレに起きた時こっそりパパとママの話し声が聞こえてきました。僕の家はパパが友人の保証人になった時にそのまま騙されて、借金まみれで火の車なんだそうです。いつも休みになったら釣りやドライブに連れて行ってくれたパパ。料理が上手で優しかったママ。あの頃の幸せな家族に戻りたいです”

「以上。日本の横浜在住、たかし君6歳からだ」

「お前、凄え神妙な顔で読み上げてっけど、こんなのどうしろってんだよ。お手上げじゃね? 最早サンタさんへのプレゼントの規模を超えてね? 何か読み進めていく内に、どんどん手紙の内容が深刻になってんのは気のせいかな? つうか、お前何泣いちゃってんの!? ラペン!」

「だってさあ、可哀想じゃないか。こんな幼い内にさあ。戻してや

ってよラプス。たかし君を、幸せだった頃の家族にさあ」

「いやいやいやいや。もうここまでできたら、サンタの範囲外だから。神様の領域だから。知らないよ？ 俺達カンケーないよ？ 何普通に感化されちゃってんのこの人！」

克蘭プスは即座にこのリストデータを神へと送信した。そして鬼だの悪魔だの罵ってくる克蘭ペンに、次の手紙の朗読を要求する。彼は渋々涙を拭きながら、次の手紙を手を取った。

“ サンタクロースさんへ。今年は彼女と過ごしたいので、ソリ引きの仕事休ませてください。by コメット ”

それはサンタのソリを引く九頭のトナカイ——ニコルの妻、ルドルフも含む——の中の、八頭目のトナカイからの手紙だった……。

「コメットの野郎……。この仕事を舐めやがって。殺す。殺して燻製にして、乾し肉として冬の保存食にしてやるっ」

コメットからの手紙をビリビリに引き裂く克蘭プスの隣で、次の手紙を手にした克蘭ペンのんびりとした口調で言った。

「これ、二頭目のトナカイ、ダンサーからだよ。旅客機のチケットが僕達家族分入ってる。ほら、四枚」

「何だと！？ って事はコメットの彼女ってえのはダンサーの事か！ 両方とも保存食逝きだクソトナカイがあー！！」

克蘭プスがそう絶叫を上げるや否や、ドアが叩き開けられけたましい罵声と共に、彼の頭に空き缶が飛んできた。

「誰がクソトナカイだってえ！？ トナカイ馬鹿にするとただじゃおかないよ！！」

「ママもトナカイだからねえ」

「お袋……普段擬人化しておきながら、しっかりトナカイの自覚がまだ残ってやがったのか……」

見事母親からの空き缶が額にクリティカルヒットして、椅子から床へと倒れ込む弟を克蘭ペンはニコニコと笑顔を見せながら、他人事の様に覗き込むのだった。

style. 2 (後書き)

更新後に、実はトナカイにはそれぞれ性別と性格があると分かり、慌てて訂正しましたw。

じゃあルドルフのオスという設定はどうなるのかって？

……無視ww。

style. 3

「お袋。コメントとダンサーが付き合いましたらしくてさあ、当日デートしたいからソリ引き休むってよ」

クランプスはダイニングに戻ると、椅子に腰を下ろしてまだ残っているコーヒーを啜る。瞬間。

「――マジでか!？」

この上なくドスの利いた獰猛さを含む声が轟いた。見ると、ルドルフの両眼が業火の様な真紅の光を放っていた。

「落ち着いてママン。自慢の紅い眼力がシャイニングしちゃってるよ」

同じくダイニングに戻ってきたクランペンが、他人事の様に爽やかな笑顔で冷静沈着に宥める。それに気付いて慌てて眼力を収めるルドルフ。

「あ、あらヤダわ。私としたことが。つい殺意を抱いちゃうだなんて。テヘ♪」

照れ臭そうに言う舌を出しながら、自分自身で頭を拳で小突く。すぐ側に座っていたニコラオスが、チキンソテーをフォークで突付きながらぼやいた。

「まさかそのピカピカの赤いお目々が、別の事でも役立つとは出会った当時は気付きもしなかったよ」

そう。赤鼻のトナカイ、ルドルフ。その本性は赤鼻ではなく、灼眼である事は身内以外誰も知る由もない。今でこそ擬人化しているが、その姿は口調や性格とはまるでかけ離れたライトブラウンのセミロングヘアという、そこらの美少女アニメに出てくる容姿をしている。なので一見若い年齢不詳だ。

「よし。召集だ」

ルドルフの言葉に、三人は怪訝な表情で彼女に視線を送る。

「トナカイ全頭召集命令を下しな！　これからトナカイ会議だ！」

「だってよ。ラプス」

「ったく。仕方ねえな」

母親と兄に促されてクランプスは渋々自室に行くと、自分専用のクリスマスアイテム、錆びた鐘を持ち出して戻ってきた。そしてそれを眼前まで持ち上げると、今まさに振り鳴らさんとはかりに鐘を傾ける。それを見た父、ニコラオスは慌てて止めに掛かる。

「まっ、待て！　お前まさかここでその鐘を鳴らす気——か……」
が、言い終わる前に息子の行動を見て硬直した。

「あー、応答せよ応答せよ。こちらクランプス。てめえら全員、今すぐ我が家に集合。お袋がトナカイ会議を始めるってよ。怨むならコメントとダンサーを怨め。奴ら付き合いだして今年のソリ引き休むって抜かしやがったんだから。そういうこって、さっさと来やがれよクソ共」

「応答せよの意味を成してなかったね。ラプス」

そう糸電話宜しくに鐘に向かって話しかけたクランプスに、のんびりした口調で指摘するクランプペン。

「え？　何？　それって鐘以外にも役立つの？」

「おう。糸電話新型鐘電話。ちなみに糸じゃなくて電波に乗せるから、あいつらの首輪に付いてる鐘にも伝わる仕組みになってる」

父親の疑問にさも当然の様に答える息子。

「何でそれ？　携帯電話じゃいけなかったのか！？」

「相変わらずあったま悪いなあこのクソ親父。相手はトナカイだぞ？　トナカイが一体どうやって携帯扱うんだよ。手続きすら不可能だろうが」

「いや、まあ確かにそうなんだろうけど。なんでかなあ。お父さん、凄く腑に落ちないのは」

「ヤダなく、パパン。耄碌もろくきてんじやないの？」

「誰が耄碌じゃい！　こちとらどんだけ長年世界中飛び回ってると思ってたんだ！　バカにすんじゃねえよ？　老人スピリット！」

「そうだよあんた達。お父さんを簡単にバカにしちゃいけないよ」
夫と双子の息子達の遣り取りに、冷静にルドルフが言葉を挟む。

「お袋……」

「ママ……」

「ルドリー……」

さすがは妻だけはある。普段どんなに乱暴猛々しい性格をしていても、やはりいざとなればしっかり母親としてきちんと息子達を教育し、父親の威厳を守るだけの度量が――。

「この人はね。こう見えても夜になったら信じられないくらい遅くなるんだから。さすがは本業に徹夜で世界中回るだけあって、もう夜に強いなのって。私腰砕けになりそうで、避妊具さえ突き抜けそうなくらい大量放出するものだから、これ以上子供ができては大変だと最近私もピルを使用かと悩み始めたくらいなんだから」

「そっちなよ!!」

賺さずツツコミを入れるクランプスを他所に、クランプンは感激を覚えていた。

「さすがは僕のpapanだ……。なんて羨ましい精力。どうしたら一晩中持つのか教えてよ」

「大丈夫だクラッピー。お前も私の息子なら、しっかりそこも受け継いでいるはず。まだ覚醒されていないだけだ。いつか時期が来れば自ずと分かるはずだ。己の中で頭をもたげる野獣の気配がな……」

「本かいpapan!? だけどラプスだけでなく僕にまでクラッピー呼ばわりしたら、区別が付かないよ。今度またそう呼んだらpapan。その時は鎖で首を絞めて、乾し肉と一緒に吊るしてもいいかな?」

「ウフフ。さすがは親子だねえ。ラペン」

父とクランプンの和やかな遣り取りに、目頭を熱くして微笑ましく見詰めるルドルフ。

「いや、なんか明らかに方向間違ってるから。福知山線事故くらいの勢いで話が脱線しまくってるから」

自分を除く三人の親子に、ウンザリしながらツツコミを入れるクランプであった。

「お呼びですか？ ミセス・ルドリー」

そう言って真っ先にやって来たのは、ソリを引く順番では五番目を担当しているドンターだった。

彼は冷静沈着で紳士的な性格をしていて、今も立派にスーツを着こなしたトレンチコートを上から羽織っている。……え？ トナカイだろうって？ はい。そうですよ。勿論ですとも。トナカイです。Yes. He is a reindeer. (はい。彼はトナカイです)。

特に耳の辺りを重点的にですが。じゃあ擬人化と大差ないだろうですって？ あなた。今まで何を讀んできたのですか。サンタクロースであるニコラオスの妻ルドルフをご覧なさい。彼女もトナカイじゃないですか。何か問題でも御座いましたでしょうか？ 何ですって？ 結局擬人化じゃないかですって!?

……それでもトナカイなんだからいいじゃないか!!

「おい。何かナレーター的なもんが争ってないか？」

「そおう？ 僕には開き直っているように聞こえるけど」

ラプスとラペンが地の文に対して意見しあっているようだ。よし。読者諸君よ。ここはひとまず本題に戻ろう。続きは感想で会おう！ そんなこんなで、とにかくやって来た“トナカイ”のドンターに、同じく“トナカイ”のルドルフは無愛想に答える（作者の意地でトナカイを強調）。

「だから来たんだろうあんたは」

「尤もですね。では、皆が集まるまで紅茶を頂いても宜しいですか？」

「勝手にしな」

「では、有難く」

素っ気無く傲慢な態度であるルドルフの態度に、これと言って不愉快さを示す事もなくいつもの事として、平然とドンターはキッチンへ赴くと紅茶の用意を始めた。

「お？　なんでい。紅茶作ってんのかドンター。だったらついでに僕のも作ってよ。砂糖とミルクたっぷりで宜しく！」

次にやって来たのは、ソリを引く順番では三番目を担当していて嗅覚が優れている、プランサーだ。見た目はカジュアルな男装をしているが、れっきとした女の子だ。頭に生えている立派な角がトナカイらしい。

……いや、違った。トナカイなんだから当たり前だ。ちょっと人によっては角の生えた、ボーイッシュな女の子に見えるだろうがトナカイであるのは確かだ！

「いいタイミングで来ましたね。プリン。とびきり甘いミルクティーをご所望ですか。構いませんよ」

「おいドンター！　プリンって女みたいな愛称で呼ぶなって言うだろう！　ランサーだよ！」

「おやおや。レディーに対する私なりの、嗜みなのですがねえ」

ムキになって文句を言うプランサーに、ドンターはキッチンで彼女の分の紅茶も作りながら、静かに苦笑する。

「今の時間に会議だなんて、いい迷惑だわ。せっかくお肌の手入れをして、今から寝ようとしていたのに」

そう愚痴を言いながらやって来たのは、ソリを引く順番では四番目を担当するヴィクセン。とにかくオシヤレに気を使う女性で、お尻にあるトナカイのシッポが余計に彼女をキュートでチャームミングに魅せている。

同じくやって来たのは、ソリを引く順番では七番目を担当しているキューピッド。彼はルドルフを見つけるなり、その粘っこく甘いたるい声で口説きに掛かった。

「やあハニー。この僕をこんな時間に呼び出すなんて、ついに老い

ばれジジイに愛想が尽きたのかい？」

そうしてルドルフの両手をギュツと握り締めると、そのトナカイらしいつぶらな瞳で彼女をジツと熱く見詰めた。

「誰が老いぼれジジイだコルア！ 仮にも主に向かって！ この色ボケトナカイ！！」

賺さずニコラオスがキューピッドにツツコミを入れる。

「召集命令の時に言っただろう。コメツトとダンサーの奴が付き合いだして、デートしたいからソリ引き休むって言いやがったと」

ルドルフはそうぶつきら棒に言うと、キューピッドの手を振り払う。

「ああ。ダンサーがね。きっとそれは、コメツトの差し金だと思うよ。僕が彼女と付き合った時は、そんないい加減さは見せなかったからね」

「お前、ダンサーと付き合ってたんかい！」

克蘭プスのツツコミに、彼はそのつぶらな瞳をウィンクして見せながら、平然と頷く。

「ああ。サマーバケーション中に、一ヶ月間だけ。彼女サイコーだよ。踊り子しているだけあって、もうベッドでも相手を飽きさせないくらい踊り狂ってくれてさ。もう僕ばかりがイキまくりだったよ」

「手当たり次第なんだね。キューピー」

「いや、お前が言うなラペン」

キューピッドのさも自慢げにいう言葉に、まるで他人事のように口を挟む兄克蘭ペンへ、克蘭プスは容赦なく指摘する。

「今度ラペンも彼女と試してみたら？」

「残念ながら、僕は人間にしか興味なくてね。そんなトナカイ相手するような、獣姦^{ベス}ジジイとは違うんだよ」

キューピッドの誘いに、そうやんわりと断る克蘭ペンへ、父親の鋭い言葉が向けられた。

「え？ 今言った獣姦^{ベス}ジジイって、このパパンの事かい？ クソ息子よ。お前は仮にもトナカイの母を持つ、ハーフだつてのに？」

「私を愚弄する気かい？ ラペン」

続いて母親の殺気めいた質問に、あくまで他人事の様にニツコリと微笑んで否定する克蘭ペン。

「ヤダなあママン。僕が本気でそんな事言うと思う？ ラプスがそう言ってた受け入りだよ」

「いやちよつと待てこのクソ兄貴！ てめえ何勝手に俺のせいにしてやがる！？ 俺はんな事一言も言った覚えはねえよ！？」

しかし克蘭プスの必死の回避も空しく、母親ルドルフの怒りの鉄拳は既に彼へと降り注いでいた。

「キューピーとラペンが揃うと、ラプスはいつだって被害を被りますねえ」

穏やかに言いながら、最早今いるみんなの分の紅茶を用意したドンターが半ば同情的に言いながら、席に着くとのんびりと紅茶を啜った。

一方、克蘭プスは母親の鉄拳を脳天から受けて、テーブルに突っ伏し白目を剥いて半気絶状態に陥っていた……。

style. 5

「えーと。まだ来ていねえのは、問題の二頭と一番と六番だな」

クランプスが先程母親から鉄拳を受けた頭を擦りながら、少々不機嫌そうにその場を取り仕切る。

「あのなあラプス。僕らトナカイをナンバーで呼ぶの、やめてくれる？　ちゃんと名前あるんだからさあ」

「そうね。なんだかまるで、囚人みたいだわ」

プランサーとヴィクセンそれぞれ女二人のトナカイから文句を言われ、クランプスは煩わしそうに手を振る。

「俺はいちいちそれぞれの名前を言うのが面倒なんだよ。お袋はともかく、八頭もトナカイがいるんだぞ？」

「あなた方双子も、同じ顔してややこしいですよ？」

「顔が同じでも明らかに髪の色が違うだろう！　それくらいの区別は付けろ！」

悠然と意見するドンターに、クランプスは自分の髪を指差して見せながら、尚且つ隣にいた兄クランプペンの髪を、鷲掴みにして引き寄せる。

弟で粗暴的なクランプスは、ブルーの髪を。優しい振りして内心ドSを秘めた兄、クランプペンはピンクの髪色をしている。それぞれシヨートだ。

「奇抜な色してるので、つい認めたくなって顔だけしか見ていませんでした」

「そんな事言ったらお前、世の中のアニメキャラはどうなんだよ！　？　もうムチャクチャだよ？　ビジュアルロックバンドにも引けを取ってねえし！　それにお前らなんか、トナカイなのに当たり前の様に擬人化して一部だけトナカイだなんて、これ以上の奇抜さは他にねえだろ！！」

「うるさい」

ゴスッ!!

冷静なドンターの居直りに、ムキになって意見するクランプスを再び母親の、後頭部を挟むような拳が左から右へと流れた。

「うごはっ！ 何か今微妙にかすり取られた感じがしたよ？ 何か頭皮めいたもんが！ ラプス、ちよい俺の後頭部確認してくれ。ハゲてないか」

「うゝ……ん。――大丈夫。ちょっと焦げてるくらいかな？」

「焦げ！？ 拳で頭皮が、いや毛髪が焦げるって、一体どんな摩擦力持ってたんだよ！」

「陰毛よりかマシだと思え息子よ。ワシのジュニアに至っては、夜の激しい営みのせいで最早スツテンテンになって、まるで寺の住職のようだよ」

「自粛しろ！？ だったら！ 寺の住職らしく営みをもう自粛、いや、寧ろ煩惱から隠居しろ！？ このクソ親父！」

「何をラプス！ 母親の私から、愉しみを奪おうってのかい！」

「大丈夫だよハニー。その時はこの僕がいるから」

「パパンの下半身がパイパ……き、気持ち悪い……ウエ」

双子は両親ともれなく割って入ってきたキューピッドとで、会話が収拾付かない程乱れまくっていた。途端、突然ドアをぶち破って突進してきたものがいた。

それは……イノシシだった。正確に言うともまだ小さなウリ坊だが口元には、立派な牙が上へと剥き出している。

「な、なんだこのチビ豚……。こいつがこのドアを破壊したのか？」
吹き込んでくる寒風と雪に煽られながら、クランプスが押し倒したドアの上でズギピギ言いながら、クルクル回転してうろついている落ち着きのないウリ坊を、愕然とした表情で見下ろす。

「おや。よく来たねえダッシャー。相変わらず元気がいいんだから☆」

そう母親のルドルフが何事もなかったかの様に、満面の笑顔でそ

のウリ坊を抱き上げた。

「ええええ！？ ダッシャー！？ それが？」

思わずそこにいたみんなが声を揃えた。

「あの、以前のダッシャーは？ 確か間違いなくその時はトナカイだったよな！？ 暴れん坊だったけど」

クランプスの質問に、ケロッとした表情で答えるルドルフ。

「ああ。あいつねえ。あいつなら、二ヶ月前の晩秋に冬籠りの準備をしていたヒグマに突っ込んで行って、そのまま熊が振り下ろした前足で呆気なく逝っちまってねえ。その後継者が、この子なんだよ。可愛いだろ♪」

「いや、なんで？ なんでヒグマに突っ込んでった訳？」

「あいつは昔から猪突猛進なところがあっただろう。それでその日もいつもの様に、我が道を爆進ランナウェイ中だったんだよ。そこにヒグマが道を偶然塞いじやってさ。それでもひたすらゴーイングした結果、反撃喰らってそのまま餌食になっちまったんだよ」

「ええ！？ く、喰われたの！？ 熊に！！」

平然とそう説明したルドルフに、再度みんなは声を揃えて言った。いや、一人だけ、紳士なドンターだけは無言のままだったが。

「ねえ、聞けどルドリー。まさかそのウリ坊をダッシャー二代目にしたんだのは、そのトナカイのダッシャーの性格が猪突猛進だったから、なんて言わないわよねえ？」

ヴィクセンが、俄かに口角を引き攣らせながら訊ねる。するとルドルフは彼女へ振り返ってから、嬉しそうな笑顔で大きく頷いた。

「ピンポーン♪ 大正解！ さすがはヴィッキー。よく私の性格分かっているじゃないか！」

これにはヴィクセンだけでなく、その場にいたみんなも大きな溜息をついて呆れ果てた。

「更にお尋ねいたしますがミセス。まさか牙があれば角のある我々トナカイと大差ない、とも思われた訳ではありませんよねえ？」

続いて静かに質疑してきたドンターに、ルドルフは目を丸くして

驚きを露にする。

「凄いねドンター！　なんでそこまで分かっちゃったんだい！？」

「成る程パパン。パパンはこのママンの天然さが決め手になって、一緒にになったんだね？」

「ああ。ツンとドジの絶妙なマッチングが堪らなくて、それがまた可愛らしく見えてなあ……」

息子の克蘭ペンに問われて、妻が久し振りに見せる天然ぶりに萌えながら、顔をほころばせている。

「ま、まあ、こんだけドアを破壊するだけの威力がありゃあ、ソリを引く分にも問題ねえかもな……」

克蘭プスは口元を引き攣らせながら、母親の手の中に収まっている小さなウリ坊を見遣った。こうして、ソリを引く順番が一番目になるダッシャー二代目として、この小さいながらも怪力なウリ坊が引き継ぐ事となった。

取り敢えず、倒れたドアを起こして吹き込んでくる風と雪から我が家を守ろうと、克蘭プスが立ち上がった時だった。

のそり、のそり、とゆっくりとした動作で家に向かって近付いてくる、巨体があった。その怪しい気配に、その場にいたみんなが緊張を走らせたが、克蘭プスだけは別の意味での緊張を走らせていた。

「あ、あのお。せっかくこっちは冬眠していたのに、なんで召集命令出すんですかランプスさん……。おおおお、おいらが寒さに弱いのは、知っているでしょう？」

そう言いながら姿を現したのは、携帯用ストーブを片手に尚且つ、頭上にランプを乗つけた姿をした……。ヒグマだった。

「く、熊あああああ……！？」

みんなの声に、克蘭プスが恐る恐る振り返りながら言った。

「い、いやあ……。なんてえの？　ほら、ダッシャーもウリ坊に変わった事だしさあ、ここは一つ、ブリッツェンもヒグマに変えようって事で……。ま、まさか、ダッシャー喰っちゃった熊って、こ

いつ……じゃあないよなあ？」

ブリッツェン——六番目にソリを引いているトナカイの名前だ。

「んで？ 先代のブリッツェンは今、どこにいるのさ？」

そう目元をギラつかせながら、威圧的に訊ねてくる母ルドルフに克蘭プスは笑顔を更に引き攣らせると、キッチン天井を指差した。

そこには、冬の保存食として吊るされている、幾つもの乾し肉があった。

「え？ ま、まさか？」

ニコラオスが顔を青ざめる。

「い、いやあ、こないだ狩りに行ったじゃん？ そ、そんな時にさあ、ま、間違えて撃ち殺しちゃったんだよね……。その、ブリッツェンを。だから、代理にこいつを二代目として俺が恐喝して手下に……ア、アハハハ」

「その肉を今まで私達に食わせたんかあい！！」

「まあ、ママンにとっては共食いだもんねえ。あ、僕らもかな？

半分トナカイの血が流れるハーフだから」

他人事の様に苦笑する克蘭ペン。

こうして克蘭プスは母親の容赦ない回し蹴りを受けて、亡きブリッツェンの二代目を初代ドッシャーを叩き殺したヒグマが、後任となったのであった……。

style. 6

「さて。残るは問題の二頭か……」

ルドルフは煙草を燻らせながら、両腕を組んで椅子にふんぞり返っている。

「やっぱり、会議内容が自分達に関係しているだけに、来辛いんじゃないの？」

克蘭ペンがやんわりした口調で、思った事を口にする。

「しかも、ダンサーはともかくとして、今回の主犯はあの問題トナカイ、コメットだからなあ」

プランサーも同じく意味深に呟きながら、溜息をつくともミルクティーを一口啜る。一方克蘭プスは、すっかり母親の機嫌を損ねて居心地悪そうにダイニングの片隅で、この度めでたいのか寧ろ歓迎されていなさそうな二代目ブリッツェン、ヒグマの相手をさせられていた。

ガタガタと寒さに震えているヒグマのブリッツェンに、貼るカイロを全身数ヶ所に貼り付けている。

「一応ここ、暖炉が効いてて結構暖かいけどな。それでもまだ寒いのかよ」

「当たり前じゃないッスか。本来おいら達熊族は、冬籠りするのが基本なんスから。この程度の暖かさなんて、全然足りませんよ。グズ」

「みたいだな。メツチャ鼻水出てっとこ見ると。しかしカイロをこんな直貼りして、低温火傷とか大丈夫なのかよ」

「問題ないッス。毛皮通してるんで」

「だよな。うちのトナカイ衆と違って、お前と二代目ダッシャーだけはまんまウリ坊とヒグマだもんな。しかもダッシャーに至っては、自然の摂理に抗う事もなく言葉すら喋れねえみたいだし」

「あ、ついでにマフラーとブーツも貰っていいッスか？ できたらダウンコートも欲しいッス」

「……面倒なのを二代目に後任させちまったぜ……。こんだけしてやるからにゃあ、ソリ引きはしっかり頼むぜブリッツェン。それこそ自分の前方にいるトナカイを獲物と思って追いかけるくらいの勢い——でっ！」

クランプスの言葉が終わらない内に、母親ルドルフから椅子を投げつけられた。

「その前に、本番までに俺が生き延びられるかが最大の問題かもな……」

クランプスは椅子の直撃を受けて、頭から流血させながらも何事もなかったかのように、ふとニヒルな微笑を浮かべたがそこからは心なしか、哀愁が漂っていた。

「ええい！ 遅い！ 一体奴らは何をしてんだい！！」

ルドルフは苛立ちを露にしながら、短くなった煙草を灰皿に押し付けた。すると、しっとりとした冷静な、それでいて俄かに不気味さを含んだ声がどこからともなく聞こえてきた。

「当方ならば、ずっとこちらにおりましたよ……。ドンターが来るよりも先にね……」

気付くと、ニコラオスの咽喉下にサバイバルナイフがあてがわれていた。いつの間にか彼の背後に、コメットが佇んでいた。

「コメット貴様！ うちの亭主に刃を向けるとは！ 仮にも己の主だと言うのに！」

ルドルフは気付くや否や、声を荒げながら身構える。

「当方を勝手にこの老いぼれの従事に差し向けたのは、神の奴でしょう。こちらはちっとも望んでないなかったのに」

「コメット。あんたが神様に天から堕とされたのは、その横暴で神にさえも逆らう反逆心のせいだろう。だから更生を兼ねて、うちの旦那が神からあんたの面倒を見るように頼まれたんだよ！」

「面倒……？ 監視の間違いでは？ 当方はトナカイを守護する天

使であり、トナカイ族の王でもあると言うのに、こんな老いぼれは愚か汝がこやつ率いるトナカイのリーダーだとは。当方が汝よりも身分が上だと言うのに」

「まだ言うかコメント。アンタはもうその権利を剥奪されてんだよ！ だから守護天使は愚か、王でもないただの逆賊さ。分かったらさっさとうちの旦那から離れな！ 少しでも傷つけたらその腕、この灼眼で容赦なく焼き落とすよ」

ルドルフは言うど、双眸から真紅の光を宿して灼眼を開眼させる。それを確認するとコメントはニヤリと不気味な笑みを浮かべてから、大きく一歩後方にジャンプしてニコラオスから離れた。

「フン。この当方の流星弾撃の秘儀を封じて、汝のような一トナカイなんぞにその様な能力を託すとは、神も随分と当方を侮辱していらっしやる。今に必ずこの老いぼれと汝を始末して、神の監視から脱離し当方が受け続けた屈辱、晴らしてやりますからね」

冷淡な口調ながら愉快気にそう言うどコメントは、腰まで長く伸ばした星の様に輝き瞬きを放つシャイニングゴールドに、その毛先にかけてエメラルドグリーンからブルーのグラデーションをした髪を、背後へと手で払った。

「相変わらず反抗的だな。コメント。マジ乾し肉にしてやりたいぜ」克蘭プスの言葉に、目敏くルドルフが反応してまだ収めていない灼眼を、憤怒の形相で息子へと向ける。

「ブリッツェンを誤って射殺した拳句、乾し肉にしたアンタが言うんじゃないよ！！」

「分かった！ 分かったからその真っ赤なお目々を収めてくれお袋！ でないとマジ俺焼死するから！！」

克蘭プスは大慌てで捲くし立てながら、必死でヒグマのブリッツェンの背後に隠れた。

「惜しいなあ、コメント。この中では君が一番トナカイらしい姿してるのに」

克蘭ペン は先程の騒動など欠片も気にしていない様子で、ニコ

ニコした表情をしながら穏やかに言った。

コメント——その反抗的な態度から、一番後ろに追いやられている八番目にソリを引くトナカイであり、先程彼自身が述べたように天界でトナカイを守護し種族の王をしていた、元天使だ。

よって彼の姿は、髪こそトナカイ以前にその他ともかけ離れてはいるが、大きく立派な角を持ち耳と腰から下は二足歩行可能な、トナカイのものである。ただ他のトナカイと大きく違うのは、黄金に輝く蹄をしている事だ。勿論、衣類はきちんと着用している。

「んで？ ダンサーと付き合っているってのは？」

「フン。予があんな低俗な下級トナカイ女を、本気で相手にする訳がなからう。この老いばれに迷惑かける為に、利用させてもらっただけだ」

キューピッドの質問に、コメントは素っ気無く答える。

「ほらね？ やっぱりこいつの差し金だったろう？ まさかダンサー

はその気になっちゃあいないよね……」

キューピッドがケロツとした顔でみんなに言ってから、ふと乙女心を悪用された立場であるダンサーの事を気にかける。

「コメントてめ、さっきから黙ってりゃ調子づきよって。何度もワシを老いばれと連呼するんじゃないやねえ！　せめてサンタさんだけでも呼びやがれこの墮落トナカイ！」

怒りの矛先を向けてくるニコラオスに、コメントは何食わぬ顔で一瞥すると嫌味ったらしい口調でリピートし返した。

「ケント・デリカットさん」

「サンタクロースじゃいこのボケトナカイ！　え？　てか、なんで

？　なんでそこでケント・デリカット！？　しかも微妙に懐かし外人タレントだし！　名前の共通点、“ン”しか合ってねえよ！？

どうしてかなルドリー。こいつが口にしただけで本人は全然悪くないのに、こんなにもデリカットにラリアットを喰らわせてやりたいくらい、ムカつくのは！？」

「そうだねえ。多分、日本長期滞在しているにも関わらず未だに日

本語がカタコトなのと、やっぱりベタな眼鏡ネタが原因かねえ」

ニコラオスの怒りは、すっかりコメットを忘れて某外国人タレントに屈曲させられていた。

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン♪ 踊り子ダンサー、只今参上よん！ ウフ☆」

ここに来てようやく最後に、二番目にソリを引くトナカイのダンサーが、踊りながら吞気に到着した。

「ヤベエ。第一声一発目からして、既に死語だよ。今時そんな古いネタ使う奴は、寂びれたオッサンか時代錯誤な奴だけだぜ」

「ダンス命のダンサーに、そんな細かいツツコミは全く支障ないわよ……」

「寧ろ細かい事以前に、場の空気すら読もうともしていませんからねえ」

クランプスの意見に対して、ヴィクセンとドンターは呆れながら口にした。楽しげに踊っているダンサーは今まさに、再度灼眼を發動して超高熱ビームを放射せんとするルドルフを、プランサーが必死に止めているのにさえ気付く事もなく。

そんなルドルフの前のテーブルの上で、ウリ坊ダッシャーがブギピギ言いながら、与えられたご飯を夢中でありついていた。

「では、皆が揃った所でこれより、会議を始める」

やや力強く口にしたルドルフからは、漲らんばかりの威信がこもっていた。

「はい議長。ヒグマのブリッツェンが鼻水垂らしていて、凄く汚いです」

早速挙手するや、迷う事無くそう切り出したのは男勝りのメストナカイ、プランサーだ。

「うむ。さつさとその鼻から脱走を試みようとしている、貴様のスライムを処分せい」

「鼻からスライムに、物理攻撃は可能ですか？」

「早い内からだったら、可能だ。ティッシュが弱点だ」

「よし。じゃあ鼻をかんで、鼻孔内のスライムを一斉処分しろ」

「鼻からスライムって、おいらを一体何者だと思ってるんスカ。ズル」

続いてクランプスの質問に、ルドルフからあくまで冷静な答えを得ると彼は力強く首肯して、無駄のない動きでティッシュ箱をブリッツェンに突き出した。それに不満をぼやきながら、ブリッツェンは受け取ったティッシュで鼻をかむ。

皆はその不快な音に顔を顰めつつも、改めて会議開始にてその場を乗り切ろうと、ルドルフへと注目する。その真意を忖度した彼女は、腕を組んだ姿勢で口を開いた。

「では改めて――」

「オツカさん。この自然と偶然が織り成す神秘的なまでの吊り橋は、このまま保つべきでしょうか？ それとも心を鬼にして崩壊するべき……」

「じゃがましやあ！！ この腐れヒグマ！！ ティツシュと鼻から連結しているスライムもどきで芸術発想を引き起こしてんじゃねえ！！」 それにてめえからオツカさん呼ばわりされとうないわあ！！」

会議開始の号令をブリッツェンに邪魔されたルドルフは、目を血走らせながら怒号を放つ。同時にそれに応えるかの如く、ウリ坊のダッシャーがダイニングテーブル上を猛然と走り出すと、椅子にも座らせてもらえずに立たされているブリッツェンめがけて、突進した。

そのウルトラダイナミックパワフリヤアタックをもろに受けたブリッツェンは、そのまま白目をむくと口から泡を吹きながら後ろへ倒れてしまった。

「でかしたダッシャー」

「ブギピギ♪」

飼い主ルドルフに褒められて、ウリ坊は嬉しそうに彼女の腕の中に飛び込み甘える。

「まあ、これで少しは先代ダッシャーの仇は討てたよな」

克蘭プスはまるで他人事の様に、横目で倒れているブリッツェンを見遣りながら、ボソリと呟いた。

「よし。今度こそ改めて、只今よりトナカイ会議を始める。まず今回議論すべき点は、ただ一つ。コメントとダンサーが、今年のソリ引きの休暇を求めてきた。それについて言いたい事を述べろ」

ルドルフは腕の中でピギキュピと甘え声を出している、ダッシャーを撫でながら言った。すると早速キューピッドが口を開いた。

「なあキューピー。君はコメントに騙されているんだけど、気付いてる？」

「そんな事ないわ。だってコメント言ってたもん。旅客機のチケットを送れば、ソリ引きを休んで好きなだけ踊れるって♪」

「え？ 愛の告白をされたんじゃないの？」

「えー！ まさか☆ 私が愛しているのはダンスだけ。こんな性格最悪な墮天トナカイ、例えばブロードウェイのタイムズスクエアで踊

「とてもいいと言われたって、お断りよお♪」

「この命をも天秤にかけるくらい、踊り好きにそこまで言われるとは。とことん嫌われてるな。コメット」

ダンサーのミュージカル調な言葉に、クランプスは愉快気に笑いながらみんなとは少し離れた場所に、一人座っている彼を振り返る。「予とお断りだ。こんな踊り馬鹿など」

コメットは平然と言い返す。

「で、どうするのダンサー。コメットから騙されたまま、ソリ引きを休むの？」

「休めるなら休むけど、ルドリーの様子からするととても無理そうね♪」

ヴィクセンに訊ねられて、歌いながら答える。

「だって。さて君はどうするのさ。コメット」

今度は克蘭ペンが彼を振り返る。

「予はこの老いぼれの邪魔をしたい。ゆえに欠席させてもらう」

「あくまでもその信念を、曲げる気はないようだねコメット」

「別に言う通りにソリを引いても構いませんが、その時はいつでもあなたの旦那が当方に命を狙われていると、解釈してもらいましょう。楽しいクリスマス、首を洗ってからプレゼントを配って回る事をお薦めしますよ」

ルドルフとコメットの間で火花がスパークする。その火花に、ヒグマのブリッツェンが起き上がると間に割って入った。

「ちよっとお二人とも！ 火花が出るほど睨み合うとは！ おかげで凄くあったかいッス！」

「喧嘩を止める為、間に入ったわけじゃないんかい！ 人の喧嘩で体温めてんじゃねえよブリッツェン！ ……——って、寝るなあ！」

すっかり心地よさそうにウトウトし始めたヒグマに、クランプスが容赦ない足蹴を頭部に喰らわす。

「ややっ！ すんません寝ちゃってましたか？ おいら。何せ本来

なら冬眠している時期なので、どうしても頭が勝手にスリープモードになっちまうんスよ」

「今度寝たら熊鍋決定な」

「そんな殺生な……。その時はおいらもその鍋喰ってもいいッスか？」

「いや、お前だから。鍋の具材になるの、お前自身だからブリッツェン。喰うんじゃなくて、喰われる立場だよ。お前意味分かってわざとボケてんのか？」

「戯れ中に失礼しますが、もうリアルワールドでは、今日イヴを迎えてるんですよ。こんな悠長な事、していても構わないのですか？」
それまで大人しかったドンターが、静かに克蘭プスとブリッツェンの漫才に口を挟んできた。瞬間、ニコラオスが勢い良く立ち上がる。

「そうじゃルドリー！ 会議どころではない！ 我々の世界と違って、リアルワールドの時間は経過が早いんだ！」

「それは多分、作者によりけりだと思うよ」

満面の笑顔で、平然とそう毒を吐く克蘭ペン。黙りやがれ。何いきなり普通にバラしちゃってんの！？ このドS！ 作品のキャラが筆者を侮るなんて、ありえない事だよ！？

「んー。なんかメンドクセ。だったらもうこのまま、プレゼント配りに行っちまわあ」

「議長！ もうコメントがいません！」

かったるそうにぼやくルドルフに、プランサーが挙手する。

「野郎、逃走を図りやがったか。構わん。ラプス。プレゼント配りでソリに乗っている間、ひたすら鐘電話を通してコメントへ集中的な文句を言い続けて、ノイローゼまで追い込め」

「いいけど……」

陰険だよな。やる事が。そう内心密かに思う克蘭プスの隣で、克蘭ペンが穏やかに口にした。

「でもコメントなしで、ソリ引きは無理なんじゃない？ だってコ

メットの、あの黄金の蹄と飛行能力があって、初めてソリは空を飛ぶんだから」

「え？ そうなのか？」

キョトンとするルドルフに、みんな一斉に溜息をついた。トナカイのリーダーのくせして、今まで知らなかったのかと……。

「少なくとも私が送った飛行機のチケット、役に立ちそうね♪」
ダンサーは言いながらも、まるで他人事のように踊っていた。

「じゃあ僕達トナカイも、今年は飛行機？」

「では、早速不足分の手続きを致しましょう。部屋とPCを、お借りしますよニコル」

プランサーの言葉に、ドンターは立ち上がり室内へと入って行った。

「大体よく、お前見栄えこそまさに天使の様な美貌をしていても、本当は足とか脇とかへソとか口とか、メツチャ臭えんだろう？ てーか、お前インポだから女に興味ないみてえな事言ってるじゃねえの？ あ、それとも何か？ お前ひょっとしてモーホーとか？ あり得そ〜！ 受身側だろう？ でもお前のケツにやあ、サンドワームとか棲みついてそうだよな。うわあ〜、酸っぱい！ 酸っぱいぜコメット。お前が放つスメルは。個室で二人つきりになったらたちまちそのスメルでチアノーゼに陥りそうだなコメット。アツハツハッハ！」

飛行機の中で、クランプスが鐘電話を使ってひたすらコメットに向けて、嫌がらせの言葉を送っていた。

「なんて幼稚な発想なんでしょう……」

「言っている事が陰険ね」

「ホント、ラプスはインキンタムシだよね」

「誰がインキンだゴルァ！！ 聞こえてんぞルペン！ 陰険とインキンはまるで意味が違うだろうが！！」

ドンターとヴィクセンの言葉に引き続き、もれなくついでにとばかり便乗宜しく口にした双子の兄へ、クランプスは鐘電話から口を離すと賺さず我鳴った。

「うわあ〜！ 凄いな。こんな鉄の塊が空を飛ぶんだから、人間の科学の進歩も馬鹿に出来ないな！ 僕、飛行機乗るの初めてだから嬉しいよ！」

「そうだね。人間の卑猥な珍歩も馬鹿に出来ないらしいよ。今度は男の上に乗って見たら？ ランサーはまだバージーンギゃっ！」

飛行機の窓から外を眺めてはしゃぐプランサーに、そう囁きかけ

るキューピッドへ一切の躊躇いも感じない肘鉄が、さり気無く顎へとプランサーから放たれる。

そんな中、機内アナウンスが入ってきた。

『お客様の中に、お医者様はいらっしゃいませんでしょうか？ 乗客の方から体調不良者がおられます』

「ハッ！ これはドラマや映画でよく見る、有名なシーンが現実のものに！ 面白そうだから、ちょっと見てくらあ」

「何を言ってるだルドリー。これ！ そんな野次馬根性丸出しに、いや、野次トナカイ根性丸出しにするのは見つとも無いからやめなさい！」

席を立つや颯爽と現場に向かいだした妻を、ニコラオスが慌てて後を追いかけた。そして現場に辿り着くと、その患者は――。

「え？ ダンサー？」

「え？ マジ？」

ルドルフの言葉に、ニコラオスも覗き込むとそこには、白目をむいて痙攣を起こしているダンサーの姿があった。すると背後から、冷静な声が割って入る。

「ダンサーは、常に踊っていないと死んでしまうんですよ」

冷静沈着で紳士的なトナカイのドンターだ。

「なんだその、まるで回遊魚みたいな言い方は！？」

「マグロと一緒に踊ってないと、呼吸が出来なくなるってのか？」

ルドルフとニコラオスが半ば呆れながら言った。

「そうです。彼女は生れ落ちた時には既に、まるでまな板の上の鯉の様に、跳ね回っていたらしいですから」

「めんどくさっ！」

それを聞くなり、思わず一緒になって声を揃えるルドルフとニコラオスだった。

「あゝ、死ぬかと思ったわ……。夢で死んだサンタさんがお花畑の向こうで手を振っている姿まで見ちゃったくらい」

飛行機が着陸し、ようやく外に出られたダンサーは顔面蒼白でうばやいた。

「サンタさんって、ワシの事だよね？ 確かにワシ、サンタさんで世の中通ってる存在だよな？ なんて？ それなのになんで、お前の死の間際で見たあの世の中に、ワシが手を振ってた？ てか、今生きてるよね？ ほら、こうして生きてるよね？」

ニコラオスは心配しただけに、こめかみに青筋立てて確認する。

「ちょっと酷いッスよ。なんでおいらだけ、貨物置場に寄せられるんスカ」

半ば乗り物酔いして、やたらと口から生唾を垂らしながらヒグマのブリッツェンが、不満を口にする。

「仕方ねえだろ。お前見るからにあからさまな熊なんだから」

エアターミナルを歩きながら、克蘭プスがそう言っただけ。

「でもウリ坊のダッシャーは、丸ごとイノシシじゃないスカ」

「あの子は手乗りサイズに小さいからね。ママンの懷でも、充分収まるから大丈夫だったんだよ」

「じゃあおいら、今度から球乗りの曲芸覚えれば、乗せて貰えるッスカ？」

「うん。根本的に“乗り”の意味違うからな。お前は寧ろ、上に2人乗せられるダブルかトリプルサイズだから、無茶を言わないように」

克蘭ペンの言葉に、的外れな質問をするブリッツェンへ冷静に対応する克蘭プス。

こうして一行は、プレゼント配りに向けてエアターミナルを後にした。

「そうそう。お前さあ。コメントって名前やめて、米粒に改名しろよ。そしたら俺が指でこねて丸めて、ブリッツェンの鼻孔スライムとフュージョンさせてやるよ。そしたら少しはメタルスライムくらいに、強くなるんじゃない？ いや、逃げ足速くなるか？ それはそ

れでいいかもな。ブリッツェンが鼻をかもうとしても、その素早さでかむにかめない、みたいな？ よし決めた。お前今日から、いやこの瞬間から早速コメットじゃなくて鼻からメタルな」

相変わらず道を練り歩きながらも、鐘電話からコメットへ罵倒し続ける克蘭プス。

「最初の米粒の改名、既に革命的なまでにメタルへ進化を遂げちゃってるよね。最早名前の共通点が“コメ”から“メ”だけになってるし」

それを聞いていた克蘭ペンが、横槍を入れる。ちなみに、町にサンタがやって来たら基本、彼らの息子であるこの双子の兄弟はサンタやトナカイ達とは別行動になる。別行動に――。

「さっさと仕事終わらせて帰りましょうよう。おいらもうマジ眠いッス」

「つて、なんでお前まで俺らに付いて来てんの!？」

本来はサンタである、ニコラオス組にいるべきヒグマのブリッツェンと一緒にいる事に気付いて、克蘭プスは憮然とする。

「なんかオツカさんが言うには、おいらはこっち組が相応しいって

……」

「差別？ ヒグマだから差別したのかお袋は!」

「いいじゃない。普段はラプス一人で悪い子に脅迫だったのが、もう一つ巨大な力が加わるんだから、一石二鳥じゃない」

「つか、ヒグマ一頭だけで、脅迫を通り越して軽く殺傷力抜群になるからな？ そこんとこ、分かって言ってるのか？」

「アハハ。僕は脅迫じゃなくて女の子相手の鎖でお仕置き担当だから、どうだっていいよ☆」

「凄え投げ遣りだなお前。俺はそんな兄に育てた覚えはないぞ。ラプス」

「当たり前でしょ。僕はもっぱら、パパンに性教育を受けてたんだから」

「間違ってる。明らかに何かとんでもなく間違ってる。仮にもサン

タを名乗るジジイが、実子相手にエロ育成するのは」

そうぼやく克蘭プスだったが、その本人は母親ルドルフから脅迫育成を受けていたりする。

「ほら、もう見えてきたよ。悪い子がいる家が。行ってきなようプス。ちなみに僕は、その隣で悪い女の子にお仕置きしてるから用があったら、気軽に呼びに来てね」

「ドSチックバイオエロスに、一体何の用事があって呼び出さなきゃなんのだ。とりま、一仕事終えたら携帯連絡な」

「OK.　じゃあ良いクリスマススイヴをね♪」

克蘭ペンは満面の笑顔でウィンクすると、先に歩き出しその場から離れた。

「よし。俺らも一丁、ド派手に行こうぜフレンド！」

兄の背中を見送ってから、克蘭プスは背後にいるブリッツェンへと振り返った。直後。

「ブウェックション！！　てやんでい！」

ブリッツェンの豪快なくしゃみを諸に顔面で受けた克蘭プスは、見事なまでに彼の鼻からスライムと口からリキッドゼラチンの吐出物を、浴びる羽目になった。

ブリッツェンが克蘭プスからストンピングを喰らったのは、言うまでもない……。

「まずい。非常にまずい。リアルタイムでは思いつきりクリスマスが終わってしまう」

ニコラオスは、大量の荷物をそれぞれのトナカイ達にも背負わせながら、落ち着きないように忙しげに歩を進めていた。

「それでも10件近くは配ってきたわよ」

ヴィクセンは何とかフォローするが、それが返って余計に彼の焦燥感を煽ってしまった。

「そうだ。そうなんじゃよ。もうすぐクリスマスが終わろうつてのに、まだ10件近くしか配っていない。何せお前達も分かるように、まだこれだけ大量の荷物があるんだ！」

「ピュギプギ……！」

ウリ坊ダッシャーもその怪力を買われて、もれなく手乗りサイズの小ささでも猫用の胴体ベルトを着用させられて、荷物運びに頑張っている。寧ろ、引き摺る形になっているのは、仕方がない。

「おやおや。続いての宛先は、マンション住まいの方ですか。これはいい。少なくとも、数件分はまとめて配れそうですよ」

一つのマンションの前で足を止めると、冷静沈着にドンターが優しくニコラオスの気持ちを宥める。

「うむ。そうだな……って、ここ煙突ないやんけ！」

「まだ今のご時世で煙突から入るつもりだったのかい？　今まで何の為にポストINしてきたかの意味を、少しは学習して欲しいなあ」
マンションを見るやそう騒ぐニコラオスに、キューピッドは苦笑する。

「だけどき。今までは一軒家だったりしたから、玄関先に置いていても問題はなかったけど、マンションとなるとその手段は通用しそ

うにないよな。プレゼント次第では、ポストに入る大きさばかりとは限らない訳だし」

プランサーはマンシヨンの最上階まで見上げながら口にする。するとみんなの前に、大きく進み出たのはルドルフだった。

「ここは私に任せて、アンタは他へ急ぎな」

「ルドリー……。ありがとう。恩に着て朝の就寝時には、お礼に脱衣を手伝ってやろう！」

「いっ、いいから早く先に行けったら！ ニコルのバカ！」

夫の言葉に、ルドルフは頬を紅潮させると次へと促した。

「こんな老僕にまだ喜びと恥じらいを感じられるだなんて……。ハニーも物好きだなあ」

「ワシの手足となって働くトナカイが、主に向かって老僕とはなんだ！ そこまで下卑た目でお前もワシをみてんのか！？ キューピッド！」

しかし言い終わらない内に、そのトナカイ達はみんなして先へと前進していた。

「ほら！ こっちだよニコル！ 僕らに手を引かれないと、満足に歩行もままならないのか！？」

そう遠くから叫ぶプランサーに、ニコラオスは愕然としながら屈辱氣に後を追った。

「全く。お前らトナカイときたら、主人であるサンタのワシを氣遣う事もせんとは……。って、あれ？ ダッシャーは？」

漸くトナカイ達に追い着いたニコラオスはそうぼやきながらも、ふと思っていた数より少ない事に氣付く。

「あら、本当だわ。ダッシャーがいないわね」

「大方ミセスにくっ付いて行ったんでしょ」

ヴィクセンとドンターが平然と口にしながらも、その足を止めることはなかった。

一方、マンシヨンでは騒々しい破壊音が響き渡っていた。

「行けい！ ダッシャー！ この小癪な鉄ドアの更にチェーン付きの分際で、抜けシャアシャアとサントにプレゼントを要求しておきながら、戸締りに抜かりない訪問先のドアを、片っ端からクラッシュアタックしてブチ壊しちまえい！！」

「ピギーーーー！！」

ドオオオオーーン！！

ドガアアアアーーン！！

ズドオオオーーン！！

こうしてド派手に正面突破するや、プレゼントの対象児の寝顔にのめり込むようにしてそれを押し付けながら、配っていた……。

style. 9 (後書き)

ヤベエ。

クリスマス、終わっちゃった……orz

「あわてんぼうの♪ サンタクロース♪ クリスマス過ぎ〜にやって来た♪」

自分の背後で、そう歌いながらクルクル踊っているメストナカイのダンサーを他所に、ニコラオスは必死に窓から室内を覗き込んでいた。

「むむう……。最近は何だか煙突の家が少なくなったせいで、プレゼント配りも苦労するわい」

「急いでリンリンリン♪ 急いでリンリンリン♪ 鳴らしておくれよ鐘を〜♪ リンリンリン♪ リンリンリン♪ リンリンリン♪」

そのダンサーの6オクターブに響く歌声に、室内ではまさにその歌詞に合わせる如く、危険を感じて住人が電話をしていた。

よって、一台のパトカーがやって来て降車すると、窓を覗き込んでいるニコラオスに警告を発した。

「他人の家の覗きは、良くないよお爺さん」

「やや、これはおまわりさん。いやはや、最近の家屋は煙突がなくて困りますなあ。おかげでクリスマスプレゼントを、子供達の枕元やツリーの下に置く事も出来ない」

ニコラオスのさも当然な言い方に、警察官は呆れながら適当にあしらった。

「分かってる？ 覗きも立派な犯罪だって事を。それを今度は家宅侵入しようと企んでいるとは。クリスマスは一週間前に終わっているのに、気付いてますか？ それとももしかして、アルツハイマーかな？」

「誰が“歩く大麻”だ！ この格好を見て分からんか！？ サンタだよサンタ！ みんな大好き、人気者のサンタクロースだよ！？」

「三段背肉ロースでしょう。その太っ腹なら。で？ 何？ 大麻つつた

？ 今。って事は、麻薬売人か何か？」

「麻薬売人でも三段背肉ロースでもないわ！ それに太いのは何も腹だけでなく、股間に寄生するワシのジュニアの方だって負けては——」

ガチャリ。

「は？」

おもむろに両手首に手錠をはめらる、みんな大好き人気者の筈なニコラオス。

「股間自慢する前に、よっぽど自分の言動を自主規制しなさい。はい。ちよつと署まで来てもらうよ。何もかもが怪しすぎるから」

「なーっ！？」 ただでさえクリスマス越してしまつて急いでる時に、業務妨害で訴えてやるからな——！」

「はいはい。お爺さん。あんたみたいな人種が、我々警察の業務も忙しくさせてるんだよ。ホント年末年始は愚例爺クレイジーばかり出沒して面倒だ。さ、早くパトカーに乗った乗った！」

「いやいやちよつと！ ワシにはトナカイがいるからパトカーなど必要ない——」

言いながら、みんなに同意と救いを求める視線を送るべく見ると、みんな満面な笑顔で手を振っていた。紳士であるドンターに至っては、早々と気を利かせて（！？）胸元で十字を切つて天を仰いでいた。

ガビ——Σ（ロ、——）——ン——！！

愕然となり、言葉を失つたニコラオスはそのまま車内に押し込まれると、静かにその場を彼を乗せたパトカーは走り去って行つた。

「あわてんぼうの♪ サンタクロース♪ 覗き見していゝて捕まつた♪ 怪しくコソコソ♪ 慌ててジタバタ♪ 情けない顔のジジイ♪ ガチャリ♪ コソコソ♪ ジタバタ♪」

ダンサーがとにかく踊り回る中、ヴィクセンが小首を傾げた。

「主がいなくなっちゃったけど、このプレゼントどうしようかしら？」

「困りきつた♪ サンタのトナカイ♪ 仕方がないから踊つたよ

♪ 楽しくチャチャチャ♪ 楽しくチャチャチャ♪ みんなも踊ろ
よ私と♪ ランランルン♪ ルンランラン♪ ランリンロ〜
ンキヤア!」

「大体ダンサーが甲高い声でバカ踊りしながら歌ったりするから、
住人に誤解されてニコルが警察に連行されるハメになったんだよ!」

ヴィクセンの言葉に、替え歌で横槍するかのように答えてきたダ
ンサーへ足を引っ掛けて積雪に転倒させると、煩わしそうにプラン
サーが腕組みして叱責する。そんな三頭のメストナカイのやり取り
に、お調子者で軟派なキューピッドが提案した。

「仕方ないなあ。こうなったら、僕達でプレゼント配りを行うとし
かないよ」

もっともな意見に、彼の言葉にトナカイ達は大人しく賛同するし
かなかった。

「えーと、出身国はイタリアのリキュア州パタラ町で、現在はフィ
ンランドに在住。ここに来たのは、仕事の為……。まあそこはいい
として、生年月日と本名を正直に答えてくれませんか」

「だからあ〜! 西暦352年12月6日生まれで、名前はニコラ
オス・シンタクラスだって、何回も言っておるだろうがい!」

「あくまで名前はともかくとして、苗字をイタリア発音のサンタク
ロースで誇張しますか……。大体352年生まれだと、軽く160
0歳を超えてるからありえないでしょう」

「神に聖人として地上に召喚されたのだから、当然じゃ。天では地
上で言う一年が百年の計算になる。つまり見栄えこそは地上の人間
に合わせておるが、実際は16歳と言う事になる。だからワシの股
間は今でも漲ってーあ、ウソウソ! 今のは軽いジョークだか
ら! 年齢のとこだけ! でも他は本当なんじゃよ! マジ信じて
!」

ニコラオスの言葉にいいよイラついてきたらしい警察は、再び
手錠をかけて留置所送りにしかけようとして、それに気付いた彼が

慌てふためく。

「まったく。こんな如何にも的に長くヒゲを伸ばしてるから、自分がまるでサンタになったように錯覚するのでは？　てか、これ付けヒゲでしょう？　いい加減外して——」

警察官は取調室で言いながら、咄嗟にニコラオスの長いヒゲを取り外すべくギュツと掴んだ。途端。

「モロビトコゾリテムカエマツレ〜〜〜〜……」

と言いながらフニャフニャに脱力して、業務用デスクの上に突っ伏してしまった。驚いた警察官は、慌てて手を離す。

「え？　何？　その“諸人^{もろびと}こぞりて迎え祭れ”って、確かそのクリスマスソングの冒頭の歌詞ですよね！？」

するとヒゲから手を離されたニコラオスは、ムクリと頭を持ち上げ上半身を起こすと言った。

「いや、まあ、確かにそうなんだけど、ワシはヒゲを握られると力が抜けてしまうんじゃないよ。そんな時に、咄嗟に脱力時に出してしまうのじゃ。今の言葉が」

「ハラホレヒレハレ、じゃなくて？」

「うん。ワシを含む聖人用として使用される、気が抜けたリズツコケの時の言葉」

「へえ〜〜……」

それを聞いて、つい面白くなってきたのか警察官の中に悪戯心が込み上げてきた。隙を突いて再度、ニコラオスのヒゲを掴んでみる。「モロビトコゾリテムカエマツレ〜〜〜〜……」

手を離す。それに再度起き上がったニコラオスが抗議を口にする。「だから今言っただろう！　ヒゲを掴まれると——」

「モロビトコゾリテムカエマツレ〜〜〜〜……」

ああ、面白い……！。・・・＊＋（（（＊○・ω・）○））。
・・・＊＋・ワクワク

こうしてすっかり、しばらくの間警察官のおもちゃにされるニコラスであった。

style. 10 (後書き)

年明けちゃった……ww。
il
—
liorzi
il
—
li

「オモチャで遊んだ後は、きちんとお片づけなさい！」

「ヤダよ。ママが片付けて」

「もう少し行儀良く食べなさい！」

「いいじゃん。ご飯の時くらい、楽にさせてよ」

「一体いつまで起きてるの！ いい加減寝なさい！」

「だってまだ眠くないし」

「全く。どうしてこの子は悪い子なの」

とある家庭の親子の風景。その男児はわがままで、母親に逆らってばかり。ママはそんな息子の育児にとっても苦勞していました。叱ってばかりいるので、夜眠る時はすっかり声が枯れてしまいます。そんな母親の負担を減らすべく、今まさにここに母親の強い味方が参上した！

暗い夜の闇の中、不気味に鳴り響く濁った鐘の音……。

「悪い子はいねえか……」

まさに日本秋田の風物詩、ナマハゲな乗りした言葉が鐘の音に続く。

「何か外に変なのいるから、ママ苦情を言って追い払ってよ。DVの音量が聞こえないから」

「DVはいつでも見れるでしょう。いい加減寝なさいって言うのに、ママの言う事を聞かないなんて、どうしてそんなに悪い子なの——」

瞬間、突然窓ガラスがド派手にブチ破られた。

「てめえかこのクソガキヤアー！ 誰が“変なの”だ！ ああコラ！ てめえみたいなクソ生意気なガキを見ると、超絶ムカつくんだよ！——」

そう怒声を荒げて姿を現したのは、泣く子も悪い子も黙る“悪い子一斉処分セール実施中”の脅迫担当、クランプスだ。

「さっきから外で聞いてりゃ随分と、てめえの親をナメきってるみてえじゃねえか。こんなDVDなどメー！　だ！」

そう言いながら、クランプスは当然の様に窓から室内に乗り込むと持っている錆びた鐘を、DVDに向かって振り下ろした。よって、機体ごと破壊されてしまったDVD。その様子に、男児は恐怖の衝撃を受けて硬直している。それには、もれなく母親も同じだ。

「ようガキ。随分とガキであるのをいい事に、わがまま放題みてえじゃねえか。俺なんか、わがままなんか言えないくらい恐怖の母親がいるのによお。ズルイじゃねえか。羨ましいじゃねえか。その甘えられる母親がいるだけ華なんだぞコラ。こちらそんな真似しようにもんなら、目からビームでお袋に半殺しされちまうってえのによお。まだ俺のお袋より優しいだけに、てめえの母親の言う事を聞いて、リスpekt魂でこれからは良い子になりやがれ！　分かったか！」

後半に連れるに当たっては、最早ただの個人的な妬みに変わっている事をすっかり棚に上げて、男児の胸倉を掴むと立っている自分の目の高さまで持ち上げる。

そのクランプスの半ば一方的な説教に、男児は顔面蒼白のまま必死に首を縦に振った。

「ようし。利口だ。また来年も来るから、そんな時までいい子にしてりゃあサンタが俺でなく、ご褒美にプレゼント持って来るだろうよ。そのつもりで今から一年を過ごしやがれ」

そうしてクランプスはその男児を、乱暴にTVの前にあるソファーへと投げ捨てた。フンと鼻を鳴らして愕然としている男児を見下すと、身を翻して颯爽と割れた窓から外へと出る為に、窓枠に片足をかける。するとそんな彼に、恐怖で声を震わせる母親の声が届いた。

「あ、あの、こ、こちらは一体どうすれば……」

見ると、暖炉の前でヒグマのブリッツェンが丸くなって暖を取っていた。

「てめえは何勝手にくつろいでいやがんだ！　ブリッツェンの名に恥じぬよう、ちゃんと働きやがれ！！」

克蘭プスは憤怒しながら、ブリッツェンの巨体をいとも簡単にそして容赦なく足蹴しまくると、何事もなかったようにその家から立ち去って行った。

「……坊やが良い子にしてくれたら、来年はサンタに窓ガラス代請求しようね」

「う、うん。もう僕はママの言う事聞いて、良い子になるよ……。お、おやすみなさい……」

どうやら克蘭プスの、“悪い子一斉処分セール実施中”の効果は抜群だった。

style. 11 (後書き)

犬は喜び庭駆け回り、猫は炬燵で丸くなるって、ウソだと思う。
だって雪が降ると犬だって、寒そうに丸くなって震えてるんだから
w。

ジャラリ……。ジャラリ……。

夜な夜な響く、何やら金属物を引き摺るような、不気味な音。

ジャラリ……。ジャララ……。ジャラリ……。

消灯された真っ暗な部屋で、少女は一人恐怖に戦きながら怖々とベッドサイドのライトに、震える手を伸ばす。

ジャララ……。ジャララン……。ジャリン。

少女の部屋の前で、その音はピタリと止まった。その窓のカーテン越しに、揺らめくように浮かび上がる、真っ黒な影。少女は咄嗟に悲鳴を上げ、ライトを点けるべく伸ばされていたその手は、無情にもそのライトを誤って倒してしまった……。

「ヒ……。も——許して……。アアッ！ やめてえ……。ハア、ハア」

「その割には何だか、もっと調教されたがってるようにその潤んだ瞳が、恍惚として見えるんだけど。気のせいかなあ！？」

パシィィィー！

甘い声で優しく囁きかける声と共に、少女の柔肌を打つ樺^{かば}の鞭。

「キヤアウー！！」

「さあ誓え。来年こそは良い子である事を。それとも、また僕にこうしていたぶられたいんなら、別だけど」

「ご、ごめんなさい……。来年は良い子になりま——」
ピシィィィー！！

「ヒヤウンー！！」

「惜しいなあ。君が後四つばかり年を取っていれば、もっと濃厚的に、調教できるんだけど、ねえ」

克蘭ペンは言いながら、齢12歳の少女の華奢な顎を掴むと上

へと向かせる。少女はあろう事か、パジャマは着ているとは言え、彼が持参した錆びた鎖で亀甲縛りをされている。

そう。克蘭ペンも“悪い子一斉処分セール実施中”であり、体罰担当なのだがその対象は、彼個人の趣向に重視され女子ばかりが狙われていた。

しかし彼は男ながらに妖艶なまでに美しく、甘美なまでに色っぽい。女であれば誰もが振り向くいい男だ。無論、同じ双子の弟である克蘭プスも同様だが、克蘭プスの場合は凶悪オーラ全開な為に兄のようなセクシーな魅力は、微塵も感じられない。

弟克蘭プスが邪悪なまでの悪魔なら、兄克蘭ペンは天使のような悪魔だ。

恋心を意識しだす微妙な年頃の12歳の少女は、今まさにそんな克蘭ペンへときめく蕾を開かんとしていた。そんな彼女の気持ちなど、女扱いに手馴れている克蘭ペンには一目瞭然。それを承知の上で、彼からの口づけを望まんとする少女に克蘭ペンは、顎を掴んでいた手を離すと同時に躊躇う事無く嬉々としてまだハリのある少女の頬を、平手打ちにした。

「今年悪い子だった君には、まだ僕からのキスはお預けだ。欲しければ、良い子にしてサンタさんに頼むんだね」

そうして再び、少女をその身に纏うパジャマの上へと鞭を振り下ろした。この腹黒い彼の口説き文句に、どういう訳か喜びを感じてしまう少女。自分がすっかり克蘭ペンから最早調教済みになっている事など、気付く事も出来なかった。

「さあ、あなたからメリークリスマス。俺様からメリークリスマス。K r a m p u s i s c o m i n g t o t o w n っ てなあ！ ブリッツェン」

「眠っちゃダメだ。眠っちゃダメだ。眠っちゃダメだあああああああゝゝゝ……」

意気揚々と雪道を歩く克蘭プスの後ろから、ヒグマのブリッツ

エンがまるで機械仕掛けの古いロボットのようなカクカクした動きで付いて来ながら、寒さで震える声でどこかの主人公の様に同じ言葉を繰り返し、自分を必死に励ましている。

「ねえ、聞こえてくるでしよ、鈴の音がすぐそこに、Krampus is coming to town」と、お、次の獲物はここだぜブリッツェン。一丁気合入れに、今度はお前から窓を叩き割りやがれえいっや！」

言うや否や、クランプスは素早くブリッツェンの背後に回ってこぞとばかりに、尻尾に向かって跳び膝蹴りをお見舞いした。

その勢いで、飛び上がったブリッツェンと彼の跳び膝蹴りの威力がプラスして、見事に次のターゲット宅の窓を叩き割った。――と言うより、頭から突っ込んでしまった。

しかしヒグマが窓を突き破って入ってきたというだけで、十二分にその驚異を発揮してその家の女兒は絶叫と共に、すっかりお漏らししてしまった。しかしそんな女兒に、クランプスは何事もなかったかのように窓から室内に入ると、詫びを入れた。

「いやあ、すまんすまん。今回は君のサンタさんへのプレゼントとして、ここに来たんだリーラ。毎晩お酒を飲んで暴力振るうから、優しい父親にしてくれるよう、2話目のシーンにあった手紙で送ってきてただろう？ てな訳で、その悪たれ親父は今どこにいる？」

「よよよよ、酔い潰れて、リビングソファで寝てます……」

「OKリーラ。後はこの悪い子一斉処分ハンター、クランプス様に任せとけ。行くぞブリッツェン！」

「おいら今、メツチャガラスの破片が全身に刺さってんすけど。ねえ、あの。気付いてます？ ラプスの旦那あ。つか、完全無視ツスよね？ 労りとか――」

「ねえよ」

ブリッツェンの訴えに、そう引き続き言葉を付け加えながらクランプスは彼の毛皮に刺さっている大きめのガラス片へと、ストンピングする。よって余計深々と体内に突き刺さった為、喀血しながら

渋々ブリツツェンは主の後を追った。

そして呑気にリビングソファで大いびきを掻いている、父親へと克蘭プスは踏ん返り返りながら見下すと、手にしていた錆びた鐘を軽く撫でた。するとそれは、錆びた釘が無数に刺さるバットへと姿を変える。

克蘭プスはその釘バットから一本の釘を、意味深にペロリと舐めると高々と持ち上げた。

「待ちきれないで、おやすみした子に、きっと素ん晴らスイー、プレゼント——持　うお　っ　てえいいっ!!」

一切の躊躇いも気遣いもなしに、振り下ろされる錆びた釘バット。「ぎゃああああああああああ!!」

後は見るも無残。諸君のご想像にお任せしよう。

ちなみに、ただでさえ毎晩泥酔した父親に暴力を振るわれているリーラちゃんが、更に二つも三つもトラウマが増えたのは言うまでもない……。

style. 12 (後書き)

克蘭ペンの調教シーンは、何度も己の中で頭をもたげる濡獣と戦いながら、自粛したww。

そんな自分を褒めてやりt (ry ↑

つか、R規制なしの作品目指すなら、クランプスの釘バットシーンも自粛するべきだったか？

：

……

ま、いっか！ww。細かい事はきにしない☆ww。↑

「汝等、“ジングルベル”とやらの歌詞を存じるか」

警察に連行されてしまったサンタの代わりに、せっせとプレゼン
ト配りに従事していたトナカイ達の前に、黄金に輝く蹄で空を駆け
て来たコメットが突然やって来て、言いながらみんなの前に静かに
降り立った。

するとそれに嫌さず反応したのは、歌って踊れるダンサーだった。

「はいはいはーい！ 勿論知ってるわ！」

「では歌ってみよ」

コメットに促されて、嬉々とするダンサーの様子に他のトナカイ
達はウンザリした顔をする。

せっかく落ち着いてる時に、また面倒かけるなよ……。

これがみんなの心境だった。そんなみんなを他所に、早速歌いな
がら踊りだすダンサー。

「ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る♪ ソリを飛ばして歌え
や歌え♪ ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る♪ 馬をとばし
て、いざ歌え♪」

「そこだあ！」

途端にコメットの両目がカッと見開かれ、鋭い声を放った。

「この歌では、トナカイじゃない。馬なのだ！」

「おお。そうだったのか」

半ば共感するように、プランサーが感嘆の言葉を口にする。

「つまり馬である以上、何も我々がサンタに仕える道理はないのだ

……」

「♪野を越えて、丘を越え、雪を浴び、ソリは走る♪ 高らかに、
声あわせ、歌えや楽しいソリの歌♪」

「よって、諸君らはサンタのジジイに代用されているに過ぎず……」
「♪ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る♪ ソリを飛ばして歌えや歌え♪ ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る♪ 馬をとばして、いざ歌え♪」

「歌詞にもある通り、ここは我々でなく馬に働かせれば……」

「♪森を越え、山を越え、風を切り、ソリは走る♪ 白き粉、舞い上がり、飛び交う木々の葉、ソリの影♪」

「そうすれば我々の面倒や負担もなくなり……」

「♪ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る♪ ソリを飛ばして歌えや歌え♪ ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る♪ 馬をとばして、いざ歌——」

「ええい喧しい！！ このダンス馬鹿が！ 予よが話している時からいは、歌い狂うのを控えろ！！」

「まあそれ以前に、今のご時世ソリ移動つてのも疑問なところよね」
「ヴィッキ―！ それ言っちゃお終いだよ！？ 清純な子供の夢を壊しちゃうよ！？」

他のトナカイ達を自分側に懐柔せんとばかりに、説得している傍でそのコメットの努力に水を差す如く声高々に歌い踊り、すっかり自分の世界に没頭しているダンサーに怒鳴りつけるコメット。

そのすぐ後に小首を傾げて口にするヴィクセンへ、ツツコミ担当を立候補すべく赚さずプランサーが慌てる。

「そうだ。それも一理にあるだろう」

改めて冷静さを取り戻すとコメットは、勝ち誇ったように長い黄金に毛先に至るところで、エメラルドとブルーのグラデーションが入っている髪を、サツと背後に払う。その拍子にその長髪からラメのような、黄金に煌めく粒子が飛散する。

「でもこのタイミングで現れたところを見ると、コメット。ニコルとルドリーハニーがいなくなるのを待ってたんだね」

「予にとっては邪魔者だからな」

「つまりこっそりと、我々の様子を影で伺っておられた訳ですか」

「チャンスを狙う為だ」

キューピッドとドンターの言葉に、滔々^{とうとう}と答えるコメット。

「しかも今回、コメットがソリ引き辞退したせいで私達、今こうして地道にソリ無しで雪道を歩きながらプレゼント配ってるもの。これじゃあ、ただでさえリアルワールドではもう正月も明けたと言うのに、いつまで経っても終わらないわ」

「まあ、確かに。よし。じゃあコメット。今回だけはあんたの言いつ分に従うよ。馬を用意してくれないか」

ヴィクセンのぼやきに、プランサーも仕方なさそうに納得するとコメットに頼んだ。いくら擬人化設定されているとはいえ、トナカイが馬に跨る想像は滑稽に思えるが。

「お安い御用」

コメットは言うや否や、指をパチンと鳴らした。するとそこに馬が現れた。しかも鮮血に塗れたような、真っ赤な色をしている。そう。鮮やかなまでの高級感漂う真っ赤な……。

「って、これ馬は馬でもそれをモチーフにした、馬のエンブレムの高級車じゃん！」

プランサーは愕然としながらツツコミを入れる。

そこに現れたのは、車好きな人ならもうご想像できるだろう。その通り。“フォード マスタング”のレッドカラーだ。

「エンブレムでも、馬である事には変わりあるまい。しかも、この予がわざわざ気を利かせてサンタカラーである、レッドを選考したのだ。感謝はされても文句を言われる筋合いはない」

あくまで自己顕示欲が強烈なコメットである。まあ、馬違いであるとは言えこれなら、雪も寒さも防げて行動範囲も広がる。用事を済ませたコメットは、再び星空へと姿を消した。

「でも、結局僕らが働く事には、変わらない事にコメットのヤツは気付いているんだろうか」

キューピッドは運転席に乗り込み、エンジンをかける。助手席は紳士のドンターだ。後部座席にはメストナカイ三人衆が乗車したの

だが。

「そんな細かい事はどうでもいい！ さっさと車を出してくれ！
ダンサーがまた死に掛けている！」

プランサーが、車内では踊れないせいで痙攣を起こしているダンサーの身を案じながら、キューピッドに先を促すのだった。

「さて。このマンションのプレゼントは全て配り終わったし、次に行こうかね。ダッシャー」

「キュピギギ♪」

自分の主であるルドルフに抱き上げられて、嬉しそうに腕の中で甘えるウリ坊のダッシャー。

その背後では、やたらとパトカーや大勢の人々で、騒然としているが気にする彼女ではない。そして早々に旦那のニコラオスに追いつく着こうと、一歩足を踏み進めた時だった。

「あゝ、ちよゝつといいかな。その君」

突然背後から、ルドルフを呼び止める声。彼女はハッと身を固くした。

今夜は少しオシャレして、ツインテールの立て巻きヘアにヒイラギの飾り、そしてミニスカートのサンタファッション、トナカイのデザインのイヤリング。剥き出しの素足には、真っ白い網タイツ姿。これでナンパされないはずがない！

ルドルフは身構えながら、素早く振り返った。

敵は……4人。

こんな一見か弱そうな女の子に対して、男4人とはなんとも卑劣である。これはどう考えても、女の子のルドルフ一人に4人の男達を相手にさせようと言う、5P狙いに違いない！

そのうちの一人が、軽い口調で声をかけてくる。

「君に用事があるから、こちらへ来てくれないかな？」

瞬間、ルドルフの脳裏にコマンド入力が見えた。

・戦う

- ・魔法
- ・召喚 ↑
- ・防御
- ・アイテム
- ・逃げる

迷わず“召喚”にコマンド入力すると、ルドルフは腕に抱いていたダッシャーを解き放った。

「行け！ ダッシャー！！」

「ピギー！！」

ダッシャーは迷わず4人のうち一人の男に向かって、電光石火猪突猛进を浴びせた。その男は呻き声と共に崩れ落ちる。残るは3体だ。

「この！ いきなり何をする！」

敵からの攻撃。

ルドルフのシステムコマンド。

- ・かわす
- ・カウンター
- ・防御

“カウンター”発動！

「ぬうおるりやあああああああー！！！！」

ルドルフの回転ハイキックが炸裂した。

「うぐは……！ 毛糸パンツ、見えた……」

そう呻くと男は、バタリとその場に倒れこんだ。残るは2体。だが。

「く、く、くうおぬお………っっ！ よくも私の下着を！」

まとめて撃破してくれるこのドスケベ共があああああー！！！！

「ちよ、ま、ちがつ！」

二人の男が懸命に、ルドルフが抱いている疑惑に気付き、大慌てで否定するが時既に遅し。

カッと毒々しく真っ赤に光る灼眼を開化させた。

システムコマンド、“魔法”。

「邪眼攻殺法！！」

「何だそのピッコロと天津飯の邪眼の、魔貫光殺法と気功砲が合体したような技はー！ー！ー！！」

そう絶叫しながら2人の男は、見事ルドルフによって倒された。

「よし。これで地球の平和は守られた」

「いや、違うから。寧ろ平和を破壊してるの、お嬢ちゃん、アンタのほうだから」

その声と共に、ガチャリと音がしてふとその音の方を見ると、ルドルフの両手首には手錠がかけられていた。

「ぬうっ！？ きつ、貴様あつ！ 今度は一体、何プレイを狙っている気だあー！」

ルドルフの激昂と共に、再度双眸が灼熱の光を湛えるのを慌てて止めながら、相手の男は叫んだ。

「違ああう！ 我々は警察だ！ 不法侵入及び器物破損、公務執行妨害で逮捕だよあんたは！！」

「何だと！？ 人に喜ばれはされど、逆ギレされる覚えはないぞ！ 私はクリスマスプレゼントを配っていただけだ！！」

「あのねえ。君がクリスマスにどれだけ執着しているのかまで、こっちは知らないけど、もう終わったの。クリスマスどころか、ニューイヤーまで終わってるの」

「何だとお！？ では、次は節分ではないか！」

「キュピプキィー！」

ルドルフが驚愕を口にするのを、会わせる様にしてウリ坊ダッシヤーも騒ぎ声を上げる。

「何ソレ。思いつきり日本の文化行事だよね？ とりあえず、詳しい事は署で聞かせてもらおうから」

「おのれえ！ この屈辱、貴様来年のクリスマスには、うちの双子の息子を送りつけてやるからなあ！」

「うん。それを言うなら、もう“今年”ね」

そうして往生際の悪いルドルフを押し込むようにして、警官は呆れながらパトカーに押し込むのだった。

s t y l e . 1 4 (後書き)

.....
アフウ♪
W
W。

「しかし何だね。こんだけクリスマス終わってるにも関わらず、未だモタ付きながらもプレゼント配り？　こうなったら、遅れたサンタと言うより先走り過ぎてるサンタだね」

「失礼な。ワシは相手を何度もイかせても、先走るなんていう男の恥は未だ一度も経験しておらん、我慢強いジュニアに育っておる」
「言うと思ったよ。この下ネタジジイ」

取調室で、警察相手に負けじと言い合っている、ニコラオス。
「正直思わないか？　見返りも無しで子供達の笑顔の為にプレゼント配りだなんて、我々にとっては暇人のする事だよ」

「それがどうした。いくらでもなじりたかったらなじるが良いわ。この聖なる爺さんを。しかしお主はそう言った事を、今後後悔して一生恥を抱えて生きる事になるぞ」

「逮捕されてるのに、随分強気な爺さんだね。さすがサンタさん。何を根拠にそこまで断言できる訳」

おまわりさんは、半ば逮捕した事をいろんな意味で後悔しながら、面倒そうに向かいで腰をかけている椅子の背凭れに体重をかけて、後ろ足だけで支える形で前足を浮かせ後方斜めの姿勢で訊いてきた。すると、そんな彼へ真っ直ぐに目を向けるとニコラオスは、深く頷きながらゆっくりと語りかけ始めた。

「暇になってごらん……」

そうして始まった彼の言葉は、どこかで聞き覚えのある歌詞にそっくりだった。ただ、有名なフレーズを“ヒマジン（暇人）”に変えて。

語り終えてしみじみとした表情を見せるニコラオス。
長らく続く沈黙。

おまわりさんは、口元を手で覆い隠し必死に顔を伏せている。その様子は、余りにもニコラオスの今の言葉に感化されて、懸命に涙を堪えている様に見えた。そんな健気な彼の様子に、ニコラオスは微笑むと優しい口調で声をかけた。

「いいんじゃない。何も自分を責めることはない。君は職務として、この聖なる老人を心を鬼にしてまで、逮捕してしまった。それだけの事なのだから。さあ、顔を上げて……」

言われるがままに、おまわりさんは顔をゆっくりと上げる。が、その目は据わっていた。よくよく見ると、こめかみに血管が浮き出ている。そして椅子を蹴るようにして勢い良く立ち上がると、怒鳴りつけた。

「そいつはジョン・レノンの“イマジン”だろうが！ 何さり気無く自分の言葉に変えちゃってんだ！？ このパクリジジイが——」

「誰が“ポックリ逝けよジジイ”だコルアアアアアアアア——！！」

おまわりさんの言葉の語尾は、突然開け放たれたドアと罵声に掻き消され尚且つ、音速の域に達する回し蹴りでたちまちノックアウトされてしまった。

その相手を見るや、ニコラオスは嬉しそうな笑顔で名を呼んだ。

「ルドリー！ 君なのか！ 逢いたかった我妻よ！ で？ ホントに今この人ワシの事を、“ポックリ逝けよ”だなんて言ってたかね？」

「ヤダン！ 当たり前じゃない！ そうでなきゃ、どうして私がこのクソ野郎を襲撃すると思うんだい？」

こうして同じ取調室に連行されてきたルドルフは、愛しそうに旦那のニコラオスに駆け寄って、手錠の掛かったままの手で彼の手を握り返した。それに思わず興奮を覚えるニコラオス。

「ル、ルドリー！ まさか今日は拘束プレイかい！？」

「そうだったらいいんだけど、私こいつ等に捕まってレイプの危機なんだよ！」

「……え？ 何こいつら、夫婦の上に、二人揃って状況理解してな

いの？」

ルドルフを連行してきたおまわりさんは、呆気にとられるともう取り調べも面倒臭がり、身元引受人記入用紙を取りに出て行ってしまった……。

s t y l e . 1 5 (後書き)

サンタとルドルフの声を、脳内変換で「マスオとサザエ」にして読むと、結構面白いww。

こうしてなんだかんで、ニコラオスとルドルフ夫婦は警察から追い出されるかのように釈放され、そんな二人の身元引受人としてやって来た双子の息子と共に、トナカイ達をそっちのけで一足早くフィンランドの自宅に帰った、無責任なサンタクロース一家。

クランプスと一緒にいたヒグマのブリッツェンは、最早寒さも馴染んできたらしく壊れたように笑いながら、半ばトランス状態で口からヨダレをたらしている。

「ねえラプス。ブリッツェンが口からエクトプラズム垂れ流してるけど、何かしたのかい？」

兄クランプンに問われて、弟クランプスはあっけらかんとした口調で返答した。

「いやあ、別に。ただあいつが動きすぎて腹減ったって言うから、ひとまずこれでも食っとけて、南米に行った時に偶然そこにあつた木の実を食わせてやっただけだ」

「それって、赤い小粒の実じゃなかった？」

「おお。さすがラペン。よく分かったな」

「うん。それ間違いなく、コカの実だから」

「コカの実？ 猫にマタタビみたいなものか？」

「多分適当な言い方すれば、そうとも言えるかな。人間にも効果抜群みたいだよ」

猫にマタタビだなんて、そんな物とは訳が違うのだが。

詰まる所の麻薬、コカインの原料である。神経を興奮させる作用がある為、気分が良くなり、眠気や疲れがなくなったり体が軽く感じられる様になる。

ただし、乱用を続けると、虫が体の中を動き回っているような不

快な感覚になり、實在しないその虫を殺そうと針で体を刺して傷付け始めたりする事もある。

しまいには、コカインを大量に使用した場合、呼吸ができなくなり死亡する事があるので、良い子は決して絶っつ対に使用してはナッシング。

「そうかそうか。そいつは良かった」

そんな事も露知らず克蘭プスは、笑いながら上の空になっているヒグマのブリッツェンの背中を、激励するかの様に何度も足蹴した。

「ラプスのだんな。オイラ、何だか外に出てはしゃぎたい気分でさあ」

「おお、そうかブリッツェン。そういや季節も三月に入って、もう春と変わらねえもんな。思う存分、春を満喫して来い」

克蘭プスに促されて、ブリッツェンはフラフラしながら外へと出て行った。その後が続く床の上に滴り落ちている彼のヨダレの跡に、冷ややかにルドルフが息子に言い放つ。

「ラプス。責任持って、お前があのでラリツクマのエクトプラズム、拭き取っておきなよ」

「キュピブツギー！」

ブリッツェンをまるで某有名ユルキャラ、“リラックマ”の様に言うのを賛同するかの様に、彼女の腕の中にいるウリ坊のダッシャーが甲高い声で鳴いた。鬼母の言う事は、迂闊に逆らえないので克蘭プスは、重い腰を上げる。

と、その時家の表で派手な音が響き渡った。

キキキー！！ ドゴオーー！！

何事かと、玄関のドアが開け放たれたままの外を、サンタクロース一家が覗き込むと、そこには真っ赤な車とそれに轢かれて悶絶している、ヒグマのブリッツェンの姿があった。

「おやおや。最近の若者の運転は荒いのう」

呑気にそう言うニコラオスを他所に、車内から次々と置き去りに

されたトナカイ達が降車してきた。

「ちよっと！ こっちがクリスマスプレゼント配ってきたってのに、何呑気に先に家でくつろいでんだ！」

真っ先に怒鳴り込んできたのは、男勝りのメストナカイ、プランサーだった。

「はて？ クリスマスプレゼントとな。もう桃の節句も終わったこの時期に、何を寝ぼけた事を」

ニコラオスは無責任にも、季節のせいにしてとぼけてみせる。

「何を言っても無駄だ。最早このジジイ、耄碌して死期も近い」

「どわゝれが死にかけた。この役立たずトナカイ！」

ちゃっかり一緒に戻って来た、孤高のトナカイ王コメットの言葉に、自分の立場を棚に上げて役立たず扱いにするニコラオス。

「あんた以外にそれが当てはまる奴が、他にいるのか？ ボビ

ー・オロゴンさん」

「え？ なんでそこでその名前？ 無理矢理名前の共通点を探しても“オ”しか一緒じゃない上に、寧ろ肌の色すら違ってるよ？ オイ」

コメットのツツコミに困っているニコラオスと、車の下敷きになってその重量で半ばチアノーゼ状態にある、ヒグマのブリッツェンを他所に、ようやく窮屈な車内から解放されたメストナカイのダンサーが、嬉しそうに歌を口ずさみながらクルクルと踊っていた。

s t y l e . 1 6 (後書き)

ゴメン。

今回おもしろくないかも (汗)。

こうして月日は流れてもうすぐ10月。

サンタクロース、ニコラオスはトナカイ達に長い休暇を与えて彼らも一家揃って、のんびりくつろいでいた。

一方、ヒグマのブリッツェンは今年こそはと冬籠りに備えて、山の中で秋の実りを必死こいてむさぼっている。熊は基本雑食だ。しかも冬眠の為に多量のたんぱく質摂取が必要とされてくる。

フィンランドで共存しながら獲物とする代表的草食動物は勿論トナカイ。なのでヒグマのブリッツェンは本日も毎年恒例トナカイ狩りをすべく、近場でクルクル踊っているトナカイに狙いを定めて、いざ飛び掛らんと立ち上がったその時。

一発の銃声が森の中を響き渡り、気付くとブリッツェンの頬の毛が焦げていた。

「おいその獣。貴様が狙ってるのはうちのダンサーだ。また今年も去年宜しくうちのソリの足を奪う気かい!? 大人しくサーモンでも食ってな!!」

その先には猟銃を構えた真っ赤なおめめを煌々と光らせているルドルフの姿があった。

「キュピー!」

もれなくウリ坊のダッシャーも彼女の腕の中で威嚇している。

「いやいやちょっと待ってくださいえ奥さん。去年は勝手にそっちのダッシャートナカイがこっちに突っ込んできたから偶然殺やっちゃったんじゃないッスか!」

去年の出来事は事故である事を必死に強調するヒグマのブリッツェンだが、食っちゃったことには変わらない。しかも、その代役がルドルフの腕の中に納まっているウリ坊なわけだが。

「しかも奥さんの息子が間違えて誤射しなければ、あっしが“ブリツツェン”を名乗る必要もなかったわけで、しかもその干し肉を一家揃って美味しく頂いちゃた事実も否認ないだろうし。つか、なんでここにいるんスカ」

それは勿論、冬に備えての食料調達に一家揃ってやって来たのだ。ヒグマの言葉に目の色を変えると（もう既に灼眼に変わっているのだが）思い出したように息子のクランプスを振り返る。

「ラプース！！ 今度はうちのトナカイ連中を誤射すんじゃないよー！！」

「え？」

振り返るクランプス。同時にとどろく銃声。暫しの間の後、何かが空から降ってきた。

ヒュルルルルウウウ………、ドサン！！

みんな一斉にそちらへと目を向ける。

そこには眩いばかりの腰まで長く伸ばした星の様な輝きを放つシヤニンゴールドに、その毛先にかけてエメラルドグリーンからブルーのグラデーションをした髪の毛の、両足は黄金の蹄をしたトナカイの足を持つ半人半獣のコメットがうつ伏せに倒れていた。

紛れもなく飼い主のニコラオスに反抗的な墮天トナカイ王だった。立派で大きな角の片方が恐らく銃弾により折れてしまっている。

「いやあ、なんてーの？ ほら、空見上げて鳥でも狩ろうかなあ〜とか思ったら、トナカイ飛んでんじゃない？ だからこれは珍しいと思ってつい引き金をだな」

「珍しいって、過去毎年空飛ぶトナカイでプレゼント配りしてる立場だよ。僕達」

クランプスのとぼけた発言に、双子の兄クランペンが柔和な口調でさりげなく指摘する。

「いや〜っはっはっは！ 最近のトナカイファミリーは豚とか熊とかいる始末だから、もうどうでもいいかななんて思えてさあ！」

「豚じゃない！ ウリ坊だ！」

「キュピブッキー!!」

母親ルドルフの鋭い言葉に、ウリ坊ダッシャーも一緒になって抗議する。

「いやでもあれだぜ？ 今年こそは誤射しないようにして、空に銃口構えてたのに、そこに飛んでくるトナカイの方がバカなんじゃないの？」

「確かに射程範囲内に来られたら、撃ちたくはなるよねえ」

クランプスの意見に、静かに微笑みながら賛同するクランペン。

「そうだな。バカだな。よし、そんなヤツは見なかったことにしてこの際このまま埋めちゃおう。普段からいけ好かないヤツなんだし」

「今時トナカイで空飛ぶなんて、ロマンはあっても時代錯誤じゃない。その気になったらいくらでもセスナ機でもチャーターすればいいし、埋めちゃえ埋めちゃえ」

口々に好き勝手言うルドルフとニコラオスを含めたサンタファミリーに、ついにコメットが髪を振り乱しながら怒り心頭に立ち上がった。

「貴様らっ！ 雪の中でも問題なく行けるのは誰のお陰だと思っているんだ！ 予はそう簡単には埋められはせんからなあ！ バカにするのも大概にしろ!？」

やや半泣きになっているコメット。この墮天してもトナカイ守護天使および王である立場の自分が、ここまで侮辱されるのは辛抱堪らずに涙腺も思わず弛むらしい。

「大体トナカイが調子くれて飛んでっから撃ち落される羽目になるんだよ。草食系は草食系らしく地面で草でも食んでろ」

「仕方ないだろう飛行能力がある以上！ 鳥に飛ぶなと命じるようなものだぞ！」

クランプスとコメットが言い争っている中、ヒグマのブリッツェンはクランペンと向き合っていた。

「なんスカペンの兄さん」

「いや、気付いていないようだから言っておくけど、僕達のファミ

リーになったからにはお前に 冬眠の二文字はな
い。よ？」

——いっそ、永眠したい！！

にこやかな笑顔で容赦なくそう指摘したクランペンに、ブリッツ
ェンは頭を抱えると天を仰ぎながら心の底から思うのだった。

s t y l e . 1 7 (後書き)

気分転換でバカになれる作品。多分WW

そうしてやって来た12月。

今月は24日のクリスマスイヴに向けてサンタファミリーは大忙しだ。

大忙しなんだけど、気付けば最近その主役のサンタクロースであるニコラオスの姿が見当たらないような気がしたが、あえてファミリーは気のせいだろうと思うようにした。

近代化した昨今、稀に届く希望するプレゼントをしたための手紙はさることながら、大概はニコラオスの、タイトルを『よく考える』とサンタさんへは物欲こもった手紙ばかり』たるホームページに今年も炎上しながらのプレゼントを要求するコメントばかりが多く寄せられてきている。

- ・プリンセス人形の新作ドレスがほしいから、絶対もってきてね！
- ・マンガ本全巻そろえてプレゼントしてほしい。
- ・なんでも願いをかなえるランプはありますか？
- ・ピザ100枚とホットドック50個あれば生きていける。
- ・刑を受けて12年、そろそろシャバの空気が吸いたい。
- ・童貞守って30年、魔法使いになれると信じていたのに未だに魔法が使えません。何かコツがあったら教えてください。

「後20年修行しろ」

最後のコメントにポップコーン片手にぼやくのはニコラオスとルドルフの双子の息子の片割れ、クランプスだった。

「そんなのかわいそうだよ。せめて右手で股間にある魔法のステイックをしごけばミラクルな液体が出せますくらい、教えてあげたら

いいのに」

双子の兄である克蘭ペンが携帯電話片手にオンナノコとメールをしながら他人事のように答える。

「ふーん、じゃあお前はやったのか？ それを」

「ヤダなあ。僕はそんな必要がないくらい事足りてるから」

「だろうともこのサディスト」

和やかな雰囲気でも今日も双子の兄弟は仲むつまじくおしゃべりをしていった。そんな中、また新たなコメントが一件。

・サンタさんが欲しいのでお先に頂きました。

「どんだけ貪欲なんだよこいつ。サンタさん手に入れば一年中プレゼントが貰えると思ってるのか？ 単細胞な奴だな」

「うちのパパンの財布の紐はママが握ってるから不可能だよね」

「俺達実の息子だっておこずかい家事手伝い制度で上下してくるのに、勝手な事気軽に抜かすな」

弟克蘭プスの言葉を愉快気に笑って反応する兄克蘭ペン。途端、部屋のドアが豪快に開け放たれたかと思うと、母親である真っ赤なお目々のトナカイ（擬人化）のルドルフ（当然メス）が眼を爛々とギラつかせながら現れた。どうやら鼻息も荒い。

「どうしたんだよお袋。いきなり興奮なんかして」

息子克蘭プスの言葉にカッと見開いた目を向けるとルドルフは言い放った。

「どうしたもこうしたもないよ！ もうここ数日、二コルがいないんだ！ このままじゃ私は欲求不満で死んじゃうよ！！」

「そんな事声を大にして息子に向かって言っちゃダメじゃないママン」

克蘭ペンが首を振りながら呆れたように答える。

「言われてみれば親父いなかったな。気付かない振りしてたぜ」

「振りって事は気付いてたけどそうじゃないように振舞って立って

事かい!？」

「ママンだって性欲が溜まるまではそうしてたの知ってるよ。お互い様だよね」

しかしルドルフはクランプスが前の椅子に座っているデスクの上のパソコンを見て、更に眼を煌々と稲光らせた。

「なんだいこれは!？」 脅迫状じゃないか!! 二コルはさらわれたんだよ!!」

叫びながらルドルフはパソコンに飛びつく。

「……あんまり間の抜けた文章だったから気付かなかったぜ」

「まるでクリスマスカードみたいな書き方だね」

母親に指摘されてようやく事の真相に気付いた双子の息子達が、ルドルフからの灼眼ビームを発射されたのは言うまでもなく。

「トナカイ達も総動員してさっさと探しな! 主役がいなきゃクリスマスも始まらないよ!!」

「それを言うかな。去年は満足にプレゼント配りが当日にすら間に合わなかった立場で」

兄克蘭ペンはあっけらかんな口調でにこやかに言いながら、母親の魔眼から盾にして焦げている弟クランプスをポイと放った。

style. 18 (後書き)

次回に問題持ち越しちゃったよ。

サンタさん誘拐事件ってわけで。今年こそイヴまでに間に合えばいいな〜と悠長に思っています↑

「え？ サンタさんが盗まれた！？」

「え？ サンタさんが誘拐された！？」

「え？ サンタさんが行方不明になった！？」

「え？ ついにあの耄碌ジジイが徘徊を始めたって？」

後半は明らかに悪意のこもった間違いだが何事も無かったようにスルーして。

トナカイ達は嬉々として騒ぎ始めた。

「まあ、せっかくのクリスマスにこき使われるお前らの嬉しい気持ちは分からんでもないが、一応建前的に救出しねえとここにいる全員の命が危ない」

克蘭プスはそういって、背後でギスギスと感じる母親ルドルフの灼眼の視線にダラダラと冷や汗を流すしか出来なかった。

「まあとにかく、探すしかないね」

「探すって簡単に言うけど一体どこを探しゃあいいんだ」

兄克蘭ペンの呑気な言葉に弟克蘭プスは懽然として訊ねる。

「うーん。そうだね……とりあえずその辺とか？」

「その辺にいたらいいねー！？」

そしたらこんな無駄な苦労はしないんだよと内心思いながら、克蘭プスは精一杯の作り笑いを見せた。

結局どこから手をつけていいのかも分からないまま、みんなで真っ白い雪の覆う森林を搜索しているとふと雪ダルマを発見した。

「あ、雪ダルマだ！」

「誰がこんなところで作ったんだろう」

「足跡つけちゃえ」

トナカイ達は好き勝手言いながら足を押し付けた。途端、それは振り向いた。

「誰がスノーマンじゃボケェ……!!」

よくよく見るとそれには手足が生えている。

「うわ何こいつメツチャガラ悪っ!」

「ワシはジャックフロストちゅう妖精じゃコラァ……」

某ゲームでおなじみ有名なその口からは強烈なおいがした。

「何だコイツ酒臭っ!」

「酔っ払いかよ!」

嫌な表情をして顔を背けるトナカイ達。

「すみませんおじさん。僕達サンタクロースを探してるんですけど
見ませんでしたか?」

克蘭ペンが一切の悪気も無くジャックフロストをおじさん呼ばわりした。

「サンタクロースやと!? おどれら何夢みたいな事抜かしとんじや!!」

「キレるポイントそこ!」

克蘭プスが何かがずれているこの妖精に突っ込みを入れる。するとかすかな声が聞こえてきた。

「……だ……ここだよ……」

その声に導かれて上を見上げると、そこには見覚えのある人物が木の上で縛られていた。サンタクロース、本名ニコラオスだ。

「あんた!!」

妻ルドルフが目を見開く中、すかさずトナカイ達は今の内とばかりに雪玉をニコラオスにぶつけている。時々石まで混じっているの
でニコラオスは額から流血を始めた。言うまでも無く石を投げたのはトナカイ王であるコメットだった。

「死ねジジイ。くたばれジジイ」

「どさくさに主であるワシに何してくれてんのお前ら!」

それを他所に舌打ちするジャックフロスト。

「チッ……バレたか」

「うちの旦那をさらったのはお前かい!」

ルドルフの質問を不敵にジャックフロストは答えた。

「フッフッフ……その通り！ サンタさんを頂いたのはこのジャー」

ドカツ！！☆、（#。㐁。）ノ「」Σ（ノ'㐁）ノアウツ！！

言葉が終わらないうちにクランプスから蹴りを入れられて倒れ込むジャックフロスト。

「フッフッフじゃねえよコラ。てめえのせいでこちとら迷惑してんだよクロスぞ」

どうやらクランプスは搜索前に母親ルドルフから喰らった灼眼ビームでご立腹らしい。

「待っててパパン。今下ろしてあげるからねコメントが」

「え！　なんで予が！？」

クランプスの言葉に驚愕の表情で勢い良く振り返るコメント。

「だって空飛べるじゃない」

「自分で登ればあ！？　トナカイ頼らないで！！」

「トナカイ頼って生きてるのが僕達サンタファミリーなんだよ？」
青筋立てながら抗議するコメントに、悠然とした笑顔でクランプスは受け答える。

するとヨロヨロと立ち上がったジャックフロストが声を絞り出す。

「ワシだって……ワシだってサンタさんからクリスマスプレゼント欲しいぜよ！！」

……なんでそこで土佐弁？

内心そう思わずにはいられないみんなだった。

style. 19 (後書き)

トナカイ達の名前が省略されている件ww
次回はなるべく表示するように努力します。

トナカイ達の名前覚えるの大変なんだよ(汗。
つかクリスマス当日まで間に合うのかこれww (自信ないけど)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4836p/>

サンタクロース・ライフ

2011年12月21日22時46分発行